慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	室町時代鈔本論語集解の研究
Sub Title	Study of "Lun Yu Ji Jie" manuscript in Muromachi era
Author	高橋, 智(Takahashi, Satoshi)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2005
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.40 (2005.) ,p.143- 200
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	挿図
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20050000-0143

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

室町時代鈔本論語集解の研究

高橋　智

前　言

わが国に於ける「論語」伝本の研究は、幾つかの局面に分かれて行われる必要がある。それをいちいち挙げるならば、一は南北朝時代以前の古写・古刊本についての研究、二は室町時代の古写・古刊本についての研究、三は慶長時代の刊本についての研究、四は江戸時代以降の刊本についての研究、五は室町時代以前の邦人注釈書についての研究、六は江戸時代以降の邦人による解釈史についての研究、ということになる。これによって、ほぼわが文化史上に於ける「論語」流伝の意義は明らかになると思われる。一については、「正平版論語集解攷」（武内義雄・長田富作・今井貫一）〈昭和八年・大阪府立図書館〉、「正平版論語解題」（安井小太郎・大正十一年・斯文会）、「正平版論語攷」（川瀬一馬・昭和十八年「日本書誌学之研究」所収）などに明らかである。三については、拙論「慶長刊論語集解の研究」（斯道文庫論集三十・三十一輯、平成八・九年）に論攷した。五については、阿部隆一「室町以前邦人撰述論語孟子

注釈書」（斯道文庫論集二・三輯、昭和三十八・三十九年）によって明らかとなった。一についてはなお、鎌倉から南北朝にかけてと思われる、室町時代とは明らかに風格を異にする伝本の幾つかについて未攷のものがある。江戸時代以降については、伝本の夥しい量から、今暫く書誌学調査の蓄積を必要とする。かえって、最も調査が困難なのは、室町時代の古写・古刊本であると思われる。正平版・天文版という二つの版本、また、特に日本に遺った「論語義疏」の写本などが囲繞する状況下、「論語」講読は学問の根底たるものとの意識が定着する時代であったからである。本研究は、本文庫が慶應義塾に附属研究所として創設された昭和三十五年以来、研究事業計画の一環として継続されてきた「日本現存漢籍古鈔本の総合的研究」の研究成果の一部である。もとより、古鈔本の分析は様々な難点を抱えている。原本の実査こそが書誌学研究の最大の拠り所である。貴重本である古写本の調査に快くご理解賜った関係諸機関には深甚なる謝意を表したい。また、撮影や情報処理に本文庫の北清蔵・小川智代氏が協力を惜しまれなかったことも本論攷の成果に結びつくものであることを申し添えておきたい。

目次

序　論
第一章　古鈔本「論語集解」に影響を及ぼした正平版の存在……一四七
第二章　古鈔本「論語集解」に影響を及ぼした「論語義疏」の存在……一五三
総　論
第一章　現存する室町時代古鈔本「論語集解」の梗概……一六〇
第二章　室町時代古鈔本「論語集解」テキスト類型化の試み……一七五
第一節　清原家伝来本……一七六
第二節　正平版「論語」の影響を蒙る古鈔本「論語」……一八二
第三節　「論語義疏」の影響を蒙る古鈔本「論語」……一八五
第四節　その他、刊本や南北朝時代以前写本の影響を蒙る古鈔本「論語」……一九六
第五節　小結……一九八
各　論（待続）
第一章　現存各伝本の研究
第二章　校勘記

序論

「論語」が漢代に流行し、魏の何晏が「論語集解」を編集して、諸家の説を集め、今日に至るまで「論語」の最も完全なテキストとしてその生命を保ってきたことは、より古いテキストを求めようとする学者や、簡便な読習に用いる読者にとって、本書が必要不可欠なテキストであったことを物語る事実であろう。西暦二八五年に日本に初めて将来されたとされる「論語」が、それ以後、日本においてどのような受容を辿ったのか、その梗概は既に、拙論「安田文庫蒐集古鈔本『論語集解』について」（藝文研究・八十七号・二〇〇四）に記したので、ここに贅言はしないが、江戸時代、林羅山の登場により、南宋・朱熹（一一三〇～一二〇〇）の「論語集注」（「四書集注」の一）が一世を風靡するまでは、「集解」本が即ち「論語」であったことが、受容史の大前提となるのである。そして、「集解」本が「集注」本に取って代わられるその最後の打ち上げ花火が、慶長年間（一五九六～一六一五）に狂い咲きした本活字による印本、すなわち古活字版を中心とする一連の慶長刊本であった（拙論「慶長刊論語集解の研究」・本論集三〇・三一、平成八・九を参照）。そもそも写本を中心とした室町時代は、全て、講読のために写本を作り、訓点を加えるのであって、テキストの成立には諸本の校合が加わる為に、複雑な様相を呈するのであって、未完成なデッサンを見るが如く、その全体の姿を見極めることは非常に難しい。そのデッサンがスマートに洗練され、輪郭も整えられた姿が、慶長刊本の実態なのであった。したがって、我々は、先ず、実態有る姿を確認して、しかる後にその深奥に迫る

方法を採らねばならなかったのである。一般に、室町時代の写本の成立の複雑なことは、拙論「五山版趙注孟子校記」（本論集二九、平成六）に述べた如く、宋版・五山版・諸写本それぞれが幾重にも絡み合うのであるから、文字通り一筋縄では行かないわけである。「集解」においても、それは例外ではなく、宋版、正平版「論語」、天文版「論語」、「論語義疏」、更には、「論語注疏」、等が仁王立ちしていて、それを縫うように、京都、足利、山口（周防）等の学問の地に於いて写本が形成されるのである。しかし、逆に言えば、これらの周辺のテキストが成立乃至輸入される以前とそれ以後とに於いては、写本の性格が異なることも、当然の理であって、ここに、南北朝以前に成立した写本「論語集解」を、室町時代写本とは一線を画する者として区別した理由がある。即ち、本論はこうした意味合いから、資料分析に取り組んだ調査研究であり、最も明かにすることが困難な、しかしながら、中世期の漢学にとって、最も中心を為していた室町時代「論語集解」の学術動向の一端を解明することを企図したものである。

第一章　古鈔本「論語集解」に影響を及ぼした正平版の存在

さて、ここで、附言しておかねばならないのは、「集解」を取り巻く周辺資料についての概要である。その第一に挙げるべきものは、正平版「論語」である。正平版「論語」は、正平十九年（一三六四）に堺で出版された集解本で、日本で初めての「論語」の刊本である。正平十九年は元の至正二十四年、日本の北朝貞治三年に相当する。この初刻本（初刻双跋本）は大阪府立中之島図書館に一本と、宮内庁書陵部に取り合わせ本の一部として現存するに止め、その後、初刻本の「堺浦道祐居士重新命工鏤／正平甲辰五月吉日謹誌」「学古神徳揩法日下逸人貫書」という二種の跋

論語公冶長第五　何晏集解
子謂公冶長可妻也雖在縲紲之中非其罪也以其子妻之　孔安國曰公冶長弟子魯人也姓公冶名長也縲黑索紲寧也所以拘於罪人也
子謂南容邦有道不廢邦無道免於刑戮以其兄之子妻之　王肅曰南容弟

正平版「論語」

語をそのまま覆刻した版（覆刻双跋本）、更にその「学古・・」を省いて覆刻した版（覆刻単跋本）、また、覆刻単跋本から跋語のみを削って印刷した無跋本、明応年間（十五世紀末）の覆刻本、と計四種の版がおこされたのであった。この刊刻の順序については、種々な説が説かれたが、昭和六年九月「斯文」に発表された川瀬一馬「正平版論語攷」には、初刻本・単跋本・覆刻双跋本の順に説かれ、昭和八年に大阪府立図書館が初刻本を影印した際に附した長田富作の「正平版論語之研究梗概」に論じられているのは、単跋本が後出であるという前述の説である。しかしながら、それらの覆刻は具体的に何時頃のことであるのか、という時代推定をおこなうには十分な資料が遺されてはいない。ただ、東洋文庫には、覆刻双跋本・単跋本・無跋本が一堂に会しているので、その成立の比較をすることができる。即ち、覆刻本の版はいつ頃起こされたのかについて、おおよその推測が可能なのである。

そこで、東洋文庫所蔵の三種について見てみよう。覆刻双跋本は（二―c・a―2）五冊本で、屋代弘賢（一七五八～一八四一）・徳島藩蜂須賀斉昌侯阿波国文庫の旧蔵。江戸時代初期の丹表紙を有し、墨筆による返り点・送りが

な等の訓点、また、朱筆によるヲコト点や合点を書き入れている。一部に薄墨の附訓がみられるが、他は全て同一手によるもので、その書き手を示す奥書が巻一～六の末に記される。即ち左の如し。

巻一末　建武四年三月四日以家説授申飯尾三郎金吾了　清原頼元
　　予寛正五年庚申六月十九日於肥州廳而考正之但左方朱点清家点也
巻二末　前明経博士清原頼元飯如一之巻末
巻三末　前明経博士清頼元
巻四末　清家頼元点了
巻五末　清家頼元点了
巻六末　前明経博士頼元点

これらの奥書は全て訓点書き入れと同筆で、寛正五年（一四六四）に記されたものと見られ、建武四年（一三三七）の清原頼元の訓点を写し取ったものと考えられる。建武四年点本の原本は、大東急記念文庫に所蔵される巻子改装の十二帖、鎌倉時代鈔本で、現在、重要文化財に指定されている。頼元は、清原良枝（一二五三～一三三一）の二男で、家伝の訓を飯尾三郎に伝授したのである。いずれにせよ、本版は、一四六四年以前の刊刻に係ることが、この奥書によって証明されるのである。

次に単跋本について見てみよう。本版は（二－c・a－3）三冊本で、三條西実隆（一四五五～一五三七）の自筆点本と伝えられる。また、本版は大正十一年、安井小太郎の解説を以て斯文会から影印出版されている。訓点書き入れは、朱・墨二種あり、ともに同筆。朱はヲコト点、墨は返り点・送りがな・附訓等であり、欄外の補注も加えられ

る。巻三と巻十末に墨筆による本文書き入れと同筆の奥書が記される。

長享第三暦林鍾十八日自／儲皇竹園賜之可秘々々／亜相拾遺郎（花押）　〈巻十は「自」字無し〉

此一部訪大外記師富朝臣之訓説／并見合清家之本写朱墨点加／随分之琢磨者也後昆可秘々々

即ち、長享三年（一四八九）亞相拾遺（三條西実隆）が儲皇（後柏原天皇）より賜ったと。博士家中原氏の訓を継ぐ中原（押小路）師富（一四三四～一五〇八）の訓説に清原氏の点を加味したと言う。更に、巻三末、巻六末にはヲコト点と同筆の朱筆による奥書が記される。

巻三末　明応甲寅孟冬初三日如形加朱墨点畢（花押）

巻六末　明応甲寅孟冬初九手自加朱墨点畢（花押）

明応甲寅は一四九四年、これも前記の奥書と同筆で、三條西実隆の筆と考えられる。即ち、実隆三十五歳、四十歳の加点に係るわけである。これによって、本版は、一四八九年以前の刊刻に係ることが知られるのである。

続いて無跋本。これは、前述の如く、単跋本の跋文のみを削去して刷ったものであるから、上梓の時代は一四八九年以前であるわけだが、修刻を加えて流行したのがおおよそいつ頃であるのか、を考えて見よう。本版は東洋文庫（二―c・a―4）五冊本で、近代、向山黄邨・寺田望南の旧蔵に係る。香色の古表紙に丹の古題簽を附し「魯論」と墨書する。版面は単跋本の後印であるからして、単跋本の晴朗には比すべくもない。本版への書き入れは、後期清原家の大儒、清原枝賢（一五二〇～一五九〇）の訓点で、朱のヲコト点、墨の返り点・送りがな・附訓等が全て一筆、枝賢の手で加えられている。巻一から巻九の各巻末に「加朱墨点了」（枝賢の印）と記し、巻十末に左の如く記す。

右魯論者人倫之大用也時習／可也玩索而覚気味深長者乎／于爰不干翁専仏教余志儒術／求累家秘点不及猶豫拭渋

眼染禿筆加朱墨為他人勿令容易而／已／元亀第二歳舎辛未春二月初八／宮内卿清原朝臣（花押）（枝賢の印）

即ち、元亀二年（一五七一）に五十二歳の枝賢が加えた書き入れであると。従って本冊の刷りは一五七一年以前であることが確定するのである。

以上三本を同時に並べて比較し得ることは、古写本の研究にとっても甚だしく利益をもたらしてくれたのである。紙質はともに厚手の楮紙で正平版「論語」に特有のものである。双跋本から無跋本と時代が降るほど、料紙は黄味を帯び、双跋本は極めて上質の白紙を用いている。恐らくは、双跋本は南北朝の末から室町時代初期、即ち応永年間（一三九四～一四二七）頃を中心とした時期に、単跋本は中期、応仁文明年間（一四六七～一四八六）を中心とした時期に、開板され、無跋本は後期、天文年間（一五三二～一五五四）頃に盛んに刷られたのではなかろうか、と推測する。そもそもこうしたテキストの開板は郷紳の需要を満たすのが目的であり、彼らは博士家の訓点をそこに書き入れることに意義を見いだしていたのであって、開板と書き入れとはかなりの一体観をもって解釈するべきではないか、と考えられるからである。また、このことは、室町時代を通じて正平版「論語」が郷紳の間で重んじられていた事実をも物語るのであって、古写本の成立に正平版が多大な影響を及ぼしていたであろうことも、容易に想像できるのである。

応仁の乱（一四六七）を境として、地方に波及した学問は、周防山口の大内氏にあっては特殊な発展を遂げ、所謂、大内版の異称を持つ開板事業が続いた。「五山版の研究」（川瀬一馬）の「室町初期に於ける開板」の項に詳細であるが、「論語」にあっても、明応八年（一四九九）、大内氏の家臣・杉武道が正平版「論語」を覆刻出版している（宮内庁書陵部蔵）事実があり、正平版の存在が室町時代の「論語」受容を知る鍵であることは、疑うべくもない。

さて、その正平版のテキストが如何なる源流に帰するものであるか。中国で初めてこれを目にしたと思われる清初の蔵書家・銭曽（一六二九～一七〇一）は、その著「読書敏求記」の巻一「何晏論語集解十巻」に正平版が六朝唐初の字体に似、「已」「矣」などの助字が頗る多く文末に加えられていることが、「史記」「漢書」に引用された「論語」の本文に一致することを挙げ、古い「論語」の姿を伝えたテキストであると評価した。そして、この評価は今の中国にあっても一般的である。日本では、武内義雄「正平版論語源流攷」（昭和八年　大阪府立図書館）に論じられる通り、鎌倉時代以前の「論語」受容の実態から、清原家・中原家両家のテキストを比較し、清原家本に近いものであることが結論付けられている。しかし、更に、その清原家本の源流を辿る考証は、最早、材料を十全としない。

このような性格を持ちながら、正平版は、室町時代以降、中原家の「論語」学を見るべき遺物は皆無に等しいことからも察することができるように、清原家学が主流となるのに相俟って、正平版はますます清原家と関係を深くし、また密接な関係をもって論じられることが多くなってゆくのである。とは言え、正平版の開板にあっては、清原家との関係を示す明証は見あたらず、清原家の監修を経て開板される「論語」は、天文二年（一五三三）に清原宣賢（一四七五～一五五〇）の跋文を附して刊行された所謂天文版「論語」を待たねばならなかった。その跋によれば、泉南堺の阿佐井野氏が、応仁の乱によって滅んだ「論語」の版を再興したいと願い出て、宣賢所用のテキストを版に起こしたと言うのである。川瀬一馬博士は、この滅んだ版こそが、正平版の覆刻双跋本であるとし、覆刻双跋本の伝本が少ないのはその為である、と指摘する。実際、覆刻双跋本は、東洋文庫・宮内庁書陵部・東京大学東洋文化研究所（安田文庫旧蔵）・静嘉堂文庫（零本・松井本）を挙げるのみである。

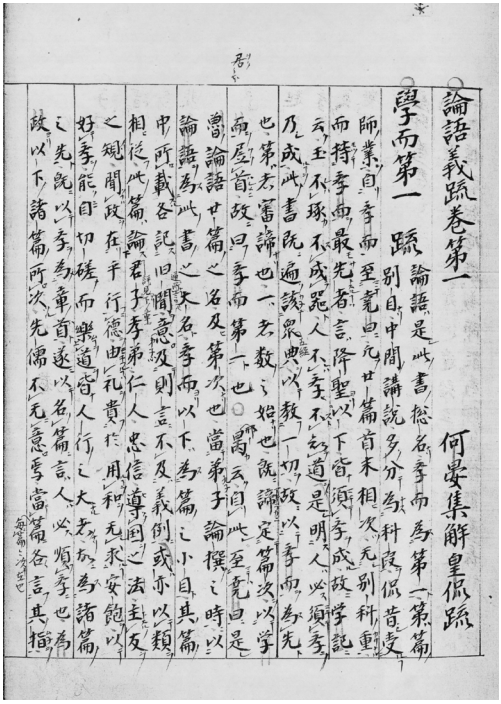
この天文版は、正平版と同じ堺で開板されていることは興味深いが、版木は細川幽斎によって堺の南宗寺に寄進さ

れたと言われ、その後、大正時代まで刷られたが、戦禍に遇い焼失した。天文版は注を省いた正文だけのテキストであるが、京都大学附属図書館所蔵に宣賢手沢の正文だけの「論語」写本が伝わり、本版の祖本を思わせる。

かくして、鎌倉時代以来、秘伝と称して、家に伝わるテキストや訓点を未公開としてきた習慣は、講義や開板によって大衆に広げて行く風潮へと変化するに至ったのであるが、この文化の流れには正平版が大きな役割を果たしていたと考えられる。つまり、正平版の流行こそが、こうした風潮を作り出して行ったと、むしろ考えるべきなのかも知れない。更に言うなれば、室町時代の清原家は、正平版を睨みながら、それに対抗するかのように、独自のテキストを形成しようとしていたのではなかろうか。

第二章　古鈔本「論語集解」に影響を及ぼした「論語義疏」の存在

第二に挙げるべき周辺資料は、既に早くから中国では滅んで伝わらなかった、梁の皇侃撰「論語義疏」である。本書は、先行の魏・何晏の「論語集解」本を底本にして、更にそれを補う注釈を加えたもので、それ故に「論語集解義疏」と称されることもある。皇侃の生卒は四八八～五四五年で、集解本の著者、魏の何晏（一九〇～二四九）から二百年以上も離れた時代の人であるから、皇侃が用いた何晏のテキストは、何晏の原本と、ある程度の距離があっても不思議ではない。まして、更に千年も時を経た日本の中世・室町時代に書写された「論語義疏」は、唐時代の注釈書、邢昺の「論語注疏解経」も混入しているのであって、皇侃の原本にすら遙かに遠いものであり、その写本に含まれる「論語集解」の本文を、単行の「集解」本文に比することは、危険な試みと言わざるを得ない。


論語義疏卷第一　何晏集解皇侃疏
學而第一　疏　論語是此書總名學而為第一篇篇別目中間講說多分為科段侃昔受師業自學而至堯曰凡廿篇首末相次元別科重而持學而最先者言降聖以下皆須學成故學記云玉不琢不成器人不學不知道是明人必須學乃成此書既遍該衆典以教一切故以學而為先也第者審諦也一者數之始也既論定篇次以學而居首故曰學而第一也○蓋云自此至堯曰是魯論語廿篇之名及第次也當第子論撰之時以論語為此書之大名學而以下為篇之小目其篇中所載各記旨間意及則言不及義倒或亦以類相從此篇論君子孝弟仁人忠信導國之法主友之規聞政在手行德由禮貴在用和先求安飽以好學能自切磋而樂道皆人行之大者故為諸篇之先既以學為章首遂以名篇言人必順學也為政以下諸篇所次先儒不元意學當篇各言其指

「論語義疏」

しかしながら、室町時代の読書人の、権威ある層の人達によって、巧みにこの二書（「集解」と「義疏」）が融合された跡を、我々は見過ごすことができないという事実がある。何時、何のために、誰によって、為されたものなのかは、わからない。しかしまた、それが複数の人達によって、めいめいが都合の良いように吸収していった、という性格のものではない。ある時、融合された形が、変わることなく連綿と受け継がれて行くのである。そしてまた、正平版「論語」の受容のように、転写などの単純な形ではなく、複雑な形をもって融合されてゆくのである。日本に於ける、室町時代に於ける、限られた地域と時代に於ける、「論語集解」と「論語義疏」の閉鎖的な特殊な兄弟関係、これを把握するには、実は、「論語鈔」の存在など、当時の学僧の営みを総体的に見渡すことが必要であるが、今、「論語集解」古鈔本の整理という課題を研究するに際しては、当面の関連資料から、慎重に推論を展開して、その解答を導き出すことが先決であろう。

日本で書写された「論語義疏」は、現在、三十種を降らないほどもあり、けして少なくはない。むしろ、これだけ写された遺物から当時を思い想像すると、この流行は異常とも言えるのではなかろうか。

斯道文庫所蔵の文明十九年（一四八七）鈔本を例に取れば、その形態は、次のようになっている。

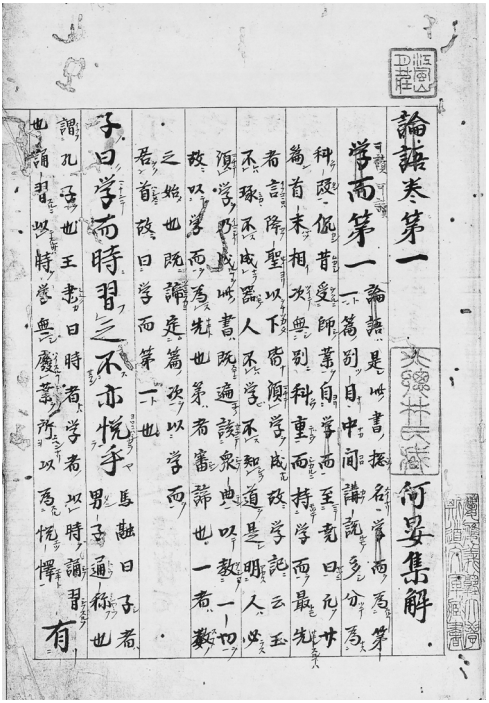
「論語義疏第一　梁国子助教呉郡皇侃撰」と題し、「論語通曰論語者是孔子没後七十弟子之門徒共所撰録也……」で始まる皇侃の序文を巻首に附す。次に、

「論語序　何晏集解」と題し、「叙曰漢中畢」と魏の何晏の序文を挙げ、その文の下に小字双行にて「東西南北四人有将軍耳北方之夷官也……」と皇侃の注釈を附す。そして、本文の巻頭が続く。

「論語義疏巻第一　何晏集解　皇侃疏」と題するが、巻二は、「論語義疏巻第二　何晏集解　皇侃疏」とあって、「第二」の下に小字双行で「八佾／里仁」と篇名を加え、巻三以降も巻二に同様の首題となっている。但し、「何晏集解」の四字を存しない巻もある。また、巻九・十のみは、「皇侃疏」の下に「凡幾章」という章数を附加する。続いて改行し、

「学而第一　疏」とあり、以下小字双行にて「論語是此書總名学而為第一第篇別目……故曰学而第一也」と「学而」篇の意義と総括を示す一文を加えている。また同じく小字双行で、「昺云自此至堯曰是魯論語二十篇之名及第次也……言此篇於次当一也」と宋の邢昺の「正義」の篇名総括文をそのまま加える。この形式は「堯曰第二十」まで同様に貫かれている。こうした各篇の首に解説を加える形は、邢昺の「正義」と全く同じ形で、これは、或いは古くからの「疏」の伝統的な形式なのであろうか。これらを終えて、本文に入る。

「子曰」その下に小字双行で疏を加える。「子者指於孔子也……」、「学而時習之」その下に小字双行で「此以下孔子言也……」と言う具合で追い込む。何晏の注は一格を下げて、「馬融曰子者男子通称也」その下に小字双行で疏を「凡有徳者皆得称子……」などと加える。テキストによっては何晏の注を一格下げないものもある。



義疏鼠入本「集解」の巻首

しかも、「義疏」の現存本を見る限り、この形態は乱れずに踏襲されているもので、如何に、転写に転写を重ねて来たかが伺える。そこで、古鈔本「論語義疏」と古鈔本「論語集解」が、形態上如何なる関係にあるかを考察してみると、「義疏」の写本には既に「集解」が含まれているのであるから、「義疏」のテキストから「疏」を削除すれば「集解」が残るわけで、煩雑な疏を省いて簡略な「集解」単行本を生み出すことは難しいことではない。しかし、一方で考えられるのは、そもそも存在した「集解」本に適宜、「義疏」の有益な疏文を借りて、附加挿入していく過程も存在するかもしれないということである。即ち、融合の形には「義疏」を主とするか、「集解」を主とするか、のいずれかの姿勢が考えられるのである。

本文や注の字句の異同にどれだけ相互の影響が見られるか、を判断することは困難を極めるが、主要な形式を以て融合の姿を俯瞰すれば、融合されたテキストには、前述の、「義疏」中の、各篇の意義と総括を示す一文が、「集解」単行本の、全ての篇にそのまま挿入されているというのが最も目立った融合の姿である。右の図を見れば、明白であ

る。

図は、「集解」本の一テキストであるが、形式から見て「学而第一」題の下に見える小字の注釈は、まさに、「義疏」の疏文そのものであることに気がつく。この形式をみれば、やはり融合の主体は「集解」にあり、「集解」が「義疏」の長所を吸収していったものとみるのが自然ではなかろうか。

早く、鎌倉時代の正和四年（一三一五）写本の清家本「論語集解」（東洋文庫蔵本）に施された正慶二年（一三三三）の書き入れとされる欄外の補注に、「疏曰」として、右に言う各篇の意義と総括を示す「義疏」の一文を加えていることは、勿論、南北朝の初頭になお「義疏」の伝本が存在したことを示すばかりではなく、「集解」を中心とした「義疏」の吸収を示す証であろうし、更にまた、この疏文の抽出が、「論語」講説の早期に流行していたことを物語っているのではなかろうか。

しかしながら、何れにもせよ、「義疏」の写本が鎌倉時代以前に遡るものが存在せず、しかも、室町時代に全く同じ形の「義疏」写本がこれだけ存在している現況を鑑みるとき、室町時代にはとりわけ、「義疏」形式の注解が相当に必要であったことが容易に推測されるわけである。この点に関して、阿部隆一「室町以前邦人撰述論語孟子注釈書考」（斯道文庫論集第二輯・昭和三十八）には次のように述べられている。「室町時代に入って、義疏を欄外等に書入れた集解本の鈔本が多くなり、義疏が急激に流行したのは、論語の講筵の開かれることが多くなり、講説の為には、集解では簡に過ぎ、さらに詳細な注解が広く要求されるに至ったからである。（中略）即ち皇侃義疏はその性格上、六朝時代に於ける、言わば仮名鈔に該当する。此が室町時代の仮名鈔盛行期の趣向に合致したことは当然である。」

まさに、「義疏」は、学僧・郷紳の講義に便を与える、至れり尽くせりの細かい注釈で、仮名鈔に見られるような

室町時代特有の邦人注釈と共通する性格を持つところから、転写が繰り返されていったのであろうとする見方が、正鵠を穿っていると言えるのであろう。

しかし、結局のところ、「義疏」は、その注釈の量の多さから、大量の複本は望み得ず、量の妥当な「集解」本が世の需要に答え、そこに、「義疏」の枢要である各篇の意義と総括を示す一文のみが、「義疏」講読の名残として止められたものではなかろうか。つまり、「義疏」「集解」二書の中世における融合は、その主体が「集解」にあったと推測したいのである。

実際、「義疏」の現存本を見ると、書写年代は、一部の影写本を除けば、大同小異、室町時代の限られた時期に集中し、それ以後はパッタリと姿を見せない。遡って、「日本国見在書目」に「義疏十巻」を著録するから、「義疏」は、平安時代には既に将来されていたと推測されるが、その後、忽然と姿を消し、中世期に、再び、邦人の改編を経て現れ、それが時流に乗って流行し、やがて宋学などの新しい学問に押されて、再び姿を消して行く。これが、「義疏」の我が国における生き様ではなかったか。

とするならば、この「義疏」を夥しく生んだ「中世」とは如何なる意味を持っているのであろうか。私は、そこに、中世の学問を主導した、関東の学校、つまり、足利学校との関わりを強く感じるのであるが、このことはまた、後述することとする。

総じて、「義疏」が室町時代の「集解」古鈔本に影響を与えるに際しては、正平版「論語」が転写などの形で単純に影響を及ぼしていったのとは違い、時勢の変化を背景に、やや複雑な、捻りよるような影響を及ぼしていったと言えるのではなかろうか。

そして、更に、正平版と「義疏」とが絡み合って「集解」本の校訂に関わってくるならば、最早、テキストの成立の由来をはっきりと同定することはできない。

現存本から言えば、はっきりと「義疏」の鼠入が認められる伝本は「集解」古鈔本全体の約三分の一を占め、更に正平版などと共に影響しあっていると考えられる「集解」テキストは全体の約四分の一を占める。従って、総体としてみれば、約半数は純粋な「集解」のテキストを離れ、中世的な諸本混在の性格を有するものであった。そして、それはまた、伝統を持つ博士家のテキストと一線を画するもので、彼が宮中を中心とした講筵を基盤とするものであったのに対し、此は寺院などを中心とした学僧の教養を基盤とするものであったことも、一つの特徴的な現象である。権威を背景とする博士家が、この動向に脅威を感じていたことは、想像に難くない。

総　論

第一章　現存する室町時代古鈔本「論語集解」の梗概

そもそも室町時代の古写本に対して、その価値を本格的に見いだし始めたのは、江戸時代後期の考証学者達であった。「論語」について見るならば、市野迷庵（一七六四～一八二六）や狩谷棭斎（一七七四～一八三五）らの蒐書校勘活動が、端を開いたと言っても過言ではない。最終的に渋江抽斎（一八〇四～一八五八）や森立之（一八〇六～一八八五）らによって纏められた「経籍訪古志」が書誌学的な意味で最も拠るべき原点であると言えるだろう。無論、遡れば、吉田篁墩（一七四五～一七九八）の「論語集解考異」、更には、山井崑崙（一六八一～一七二八）の「七経孟子考文」にも古鈔本の存在は大きな位地を占めているわけで、山井の師、荻生徂徠（一六六六～一七二八）まで源流を辿ることができるであろう。これらについては拙論「慶長刊論語集解の研究」（本論集三十輯・平成八年）を参照。もっとも、山井崑崙が用いた古写本「論語集解」は足利学校に現存するものであろうし、吉田篁墩が用いた大永四年、永禄六年の二つの鈔本は、現在、東洋文庫に所蔵されるものであるから、源流の同定は容易である。

しかし、「経籍訪古志」に至ると、現所在本との同定が困難な古写本が多く現れる。ここに、書誌学研究の原点が

存する所以である。では、「訪古志」に見える室町時代古鈔本「論語集解」の著録を実際に検討してみよう。清末、光緒十一年の徐氏刊本をもとに列挙すると（初稿本とは昭和十年日本書誌学会が影印した安田文庫蔵本、第二稿本は小嶋宝素らの書写本で同じく安田文庫蔵本）、

一、旧鈔単経本　足利学蔵

これは、「訪古志」初稿本・第二稿本に載せず。足利学校にも現存せず。

二、旧鈔単経本　京師錦子路家蔵

これは、「訪古志」初稿本・第二稿本に載せず。京師錦小路家も未詳。

三、天正四年鈔単経本　容安書院蔵

これは、「訪古志」初稿本以来載せる。初稿本・第二稿本は柳原書屋蔵とする。清の楊守敬旧蔵、台湾故宮博物院の所蔵。

四、清氏点本

これは、「訪古志」初稿本以来載せる。初稿本に「清家訓点板本」とある。現所在未詳。

五、大永甲申鈔本　求古楼蔵

これは、「訪古志」初稿本以来載せる。藤原貞幹・狩谷棭斎・木村正辞旧蔵で、現在東洋文庫所蔵、吉田篁墩が考異に用いたもの。

六、旧鈔本　容安書院蔵

これは、「訪古志」初稿本・第二稿本に載せず。八行十五字。正平版と字句異同同じ。清の楊守敬旧蔵、台湾故宮

博物院の所蔵。

七、天文二十一年鈔本　求古楼蔵

これは、「訪古志」初稿本以来載せる。八行十八字。宥鏡の署名。現所在不明。

八、旧鈔本　求古楼蔵

これは、「訪古志」初稿本以来載せる。清原枝賢の本によって、三十郎盛政が写したもの。斯道文庫現蔵。

九、旧鈔本　求古楼蔵

これは、「訪古志」初稿本以来載せる。十一行二十一字。宥俊の署名。現所在不明。

十、旧鈔本　求古楼蔵

これは、「訪古志」初稿本以来載せる。九行二十一字。俊仁の署名。現所在不明。

十一、旧鈔本　求古楼蔵

これは、「訪古志」初稿本以来載せる。八行不定字数。蜜厳院・有弁の署名。現所在不明。

十二、旧鈔本　求古楼蔵

これは、「訪古志」初稿本以来載せる。六行十三字。永享三年識語あり。元、安田文庫に所蔵されたが、現所在不明。

十三、旧鈔本　求古楼蔵

これは、「訪古志」初稿本以来載せる。九行二十字。恕通の墨印あり。現所在不明。

十四、旧鈔本　求古楼蔵

これは、「訪古志」初稿本以来載せる。八行十七字。源清房俊仁（初稿本は源を元に作る）の署名。現所在不明。

十五、旧鈔本　求古楼蔵

これは、「訪古志」初稿本以来載せる。八行十五字。一寸明珠と題記あり。現所在不明。

これを以てしても、十五点著録のうち、僅かに四点のみの所在が知れるだけで、室町時代古鈔本の奥深さが感じられるのである。

ところで、こうした研究は、それ以後、継続的に行われなかったことにより、明治時代に散佚する結果を招いたのであるが、大正になって、林泰輔が「論語年譜」を著し、「論語」テキストの整理を行った。附録の図版に室町時代の古鈔本を三点掲載している（大正五年刊）。それは、寛正本（男爵野村素介蔵）・永禄本（同上）・大永本（木村正辞蔵）の三点で、ともに東洋文庫の現蔵となっている。そしてその次に行われたのが昭和の初期であった。昭和六年五月、大阪府立図書館で、「論語」展覧会が開催された。その際の陳列品が如何なるものであったか、定かではないが、七十点ほどを選んで図録にした「論語善本書影」が京都の貴重図書影本刊行会から出版された。ここに収載された室町時代古鈔本「論語」は二十一点であった。これだけの量が一堂に会するのは、「経籍訪古志」以来のできごとで、しかも、恐らくは、絶後のことであろう。煩を厭わず、ここに現所在を確認すると、

一、　永享三年（一四三一）鈔本　　安田善次郎蔵（現所在不明）

二、　寛正元年（一四六〇）鈔本　　岩崎文庫蔵（現、東洋文庫）

三、　永正十二年（一五一五）鈔本　　岩崎文庫蔵（現、東洋文庫）

四、大永四年（一五二四）鈔本　岩崎文庫蔵（現、東洋文庫）
五、享禄四年（一五三一）鈔本　徳富蘇峰蔵（現、お茶の水図書館）
六、天文九年（一五四〇）鈔本　岩崎文庫蔵（現、東洋文庫）
七、永禄三年（一五六〇）鈔本　高木利太蔵（現、斯道文庫）
八、永禄六年（一五六三）鈔本　岩崎文庫蔵（現、東洋文庫）
九、建長七年（一二五五）元奥書鈔本　徳富蘇峰蔵（現、お茶の水図書館）
十、室町初・中期鈔本　宮内省図書寮（現、宮内庁書陵部）
十一、狩谷棭斎旧蔵本　内野皎亭蔵（現所在不明）
十二、清見寺旧蔵本　徳富蘇峰蔵（現、お茶の水図書館）
十三、根本通明旧蔵本　秋田県立秋田図書館蔵（現、同所）
十四、林崎文庫旧蔵本　神宮文庫蔵（現、同所）
十五、古鈔論語集解　高木利太蔵（現、斯道文庫）
十六、三十郎盛政鈔本　安田善次郎蔵（現、斯道文庫）
十七、元亀二年（一五七一）釈梵舜鈔本　谷村一太郎蔵（現、京都大学附属図書館）
十八、青蓮院旧蔵本　安田善次郎蔵（現、斯道文庫）
十九、古鈔論語集解　龍谷大学図書館（現、同所）
二十、永正十七年宣賢元奥書鈔本　京都帝国大学図書館蔵（現、京都大学附属図書館）

二十一、釈梅仙鈔本　　大阪府立図書館蔵（現、同所）

これをもって見れば、殆どが現在の所在に繋がるものばかりで、ただ、二点、永享三年鈔本と狩谷棭斎旧蔵本の所在が知れないのみである。狩谷棭斎旧蔵本は「経籍訪古志」の十三番目、恕通の墨印あるものがこれに相当するかも知れない。

因みに、これ以前、大正二年（一九一三）に湯島聖堂内の孔子祭典会が「論語書目」を作製しているが、これには、日本人の注釈書が集められていて、古鈔本の著録は無い。継いで、昭和の初期と思われるが、財団法人大橋図書館主催の論語展覧会が開かれ、目録が作製された。この展覧会も前代未聞の大展覧で、しかも書誌学的な水準が高い。「古版本」「古鈔集解本」「古鈔義疏本」「古鈔仮名鈔」「仮名論語」「江戸時代著述」「其他」「追加」の項目に分けられ、ほぼ現在に引き継がれる「論語」テキスト研究の体系を類別したものと評価されよう。その中に著録された室町時代古鈔本は、三十二点、かなり、大阪府立図書館の展示目録と重なる。今は、稀少な目録であるから、これも、煩を厭わず掲出しよう。

一、　永享三年鈔本　　安田善次郎蔵（大阪目録の一）
二、　寛正元年鈔本　　岩崎文庫（大阪目録の二）
三、　永正十二年鈔本　　岩崎文庫蔵（大阪目録の三）
四、　大永三年鈔本　　神宮文庫蔵（現、同所）

五、大永四年鈔本
六、享禄四年鈔本
七、天文九年鈔本
八、天文十八年（一五四九）鈔本
九、永禄元年（一五五八）鈔本
十、永禄三年鈔本
十一、永禄六年鈔本
十二、元亀二年鈔本
十三、青蓮院旧蔵本
十四、三十郎盛政鈔本
十五、建長七年元奥書鈔本
十六、徳治三年（一三〇八）元奥書鈔本
十七、清原宣條・宣光所持本
十八、賜蘆文庫旧蔵本
十九、林崎文庫旧蔵本
二十、根本通明旧蔵本
二十一、狩谷棭斎旧蔵本

岩崎文庫蔵（大阪目録の四）
徳富蘇峰蔵（大阪目録の五）
岩崎文庫蔵（大阪目録の六）
富岡益太郎蔵（現、斯道文庫）
亀田次郎蔵（現、国会図書館）
高木利太蔵（大阪目録の七）
岩崎文庫蔵（大阪目録の八）
谷村一太郎蔵（大阪目録の十七）
安田善次郎蔵（大阪目録の十八）
安田善次郎蔵（大阪目録の十六）
徳富蘇峰蔵（大阪目録の九）
徳富蘇峰蔵（現、お茶の水図書館）
京都帝国大学図書館蔵（大阪目録の二十）
宮内省図書寮蔵（大阪目録の十）
神宮文庫蔵（大阪目録の十四）
秋田県立秋田図書館（大阪目録の十三）
内野皎亭蔵（大阪目録の十一）

二十二、賀茂三手文庫旧蔵　帝国図書館蔵（現、国会図書館）
二十三、古鈔本、二冊　帝国図書館蔵（現、国会図書館）
二十四、釈梅仙写本　大阪府立図書館蔵（大阪目録二十一）
二十五、古鈔本、五冊　岩崎文庫蔵（現、東洋文庫）
二十六、古鈔本、二冊　高木利太蔵（大阪目録の十五）
二十七、清見寺旧蔵本　徳富蘇峰蔵（大阪目録の十二）
二十八、古鈔本、四冊　徳富蘇峰蔵（現、お茶の水図書館）
二十九、古鈔本、一冊（先進篇以下）　徳富蘇峰蔵（現、お茶の水図書館）
三十、　古鈔本、一冊（先進篇以下）　徳富蘇峰蔵（現、お茶の水図書館）
三十一、古鈔本、一冊（巻五・六）　徳富蘇峰蔵（現、お茶の水図書館）
三十二、清家訓点古鈔本（先進篇以下）一冊　京都帝国大学図書館蔵（現、京都大学附属図書館）

となっている。大阪の展示目録に掲載のものは、龍谷大学図書館蔵本以外、全て重なっている。新たに、徳富蘇峰の蔵書が増えたのと、帝国図書館蔵本が加わったのが特徴と言える。

またこの頃、昭和三年に、斯文会の孔子祭典の後、東京高等師範学校で、論語展覧会が開かれた。「財団法人斯文会八十年史」（平成十年）によれば、国訳訓点資料、古写古版、注釈書に分かれる展示で、岡田正之による永禄六年写本の影写本があるのみで、室町時代論語集解の古鈔本原本は見あたらない。

以上がこれまでに、実際に原本の存在が確認できた著録であるが、戦後はこうした展示会も催されることがなく、所蔵の総体を把握する機会にも恵まれなかった。そして、昭和三十年代に至って、斯道文庫の阿部隆一教授が「漢籍古鈔本の研究」を立ち上げ、原本の蒐集・各機関所蔵本の複本作製・実査による書誌調査を精力的に行い、斯道文庫は一躍、「論語」古鈔本の最大の所蔵機関となった。それによって、旧高木文庫を吸収した旧安田文庫の蒐集は、ほぼ斯道文庫に帰した。他に、岡田真の岡田文庫、残花書屋の戸川浜男、林泰輔旧蔵本、南葵文庫旧蔵本、などが加わり、この豊富な蒐集によって、斯道文庫本だけでも、室町時代古鈔本の実態をほぼ推定できるまでになった。この成果の背景には、文部省の数々の助成金を始めとして、斯道文庫賛助委員会の協力があった。研究プロジェクト開始より、既に半世紀を経て、ようやくいま成果報告に踏み出すことができる態勢が整ったのである。

先ず、現在調査が可能でかつ所在が明かとなっている室町古鈔本「論語集解」を所蔵者別に概観してみよう。

室町時代古鈔本論語集解所在表

	所蔵	巻数	存欠	冊数	函番	新蔵	時代	旧蔵
1	秋田県立秋田図書館	集解一〇巻		二	特／263	根本通明	後期	
2	斯道文庫	集解一〇巻	欠序	五	091／6	稲田福堂・林泰輔	末近世初	
3	斯道文庫	集解一〇巻	存四～六	一	091／9	尾崎雅嘉・大島雅太郎	後期	
4	斯道文庫	集解一〇巻		二	091／10	安田文庫	末	狩谷掖斎・横山由清
5	斯道文庫	集解一〇巻	欠序	五	091／11	島田氏・南葵文庫	室町	
6	斯道文庫	集解一〇巻（単経）		一	091／12	岡田真	天正一八（一五九〇）	
7	斯道文庫	集解一〇巻		五	091／66	岡田真	末近世初	清原家（伏原印）
8	斯道文庫	集解一〇巻	存序・一・二	一	091／67		室町	永厳
9	斯道文庫	集解一〇巻（単経）		二	091／68	月明荘	室町（文明頃）	
10	斯道文庫	集解一〇巻	存先進～堯曰	一	091／220		室町	
11	斯道文庫	集解一〇巻		五	092／1	高木文庫・安田文庫	永禄三（一五六〇）	
12	斯道文庫	集解一〇巻		五	092／2	安田文庫	中期	青蓮院
13	斯道文庫	集解一〇巻		二	092／4	安田文庫	室町	清原宣嘉（澤殿）
14	斯道文庫	集解一〇巻	存巻一～四	一	092／5	安田文庫	応永三三（一四二六）	主慶倍・承益・広橋家
15	斯道文庫	集解一〇巻		二	092／8	富岡鐵斎・残家書屋・宝玲文庫	天文一八（一五四九）	
16	斯道文庫	集解一〇巻	存巻六～一〇	一巻	092／9		室町	勝海舟
17	斯道文庫	集解一〇巻		二	092／16	高木文庫・安田文庫	室町	
18	斯道文庫	集解一〇巻		五	092／49	残花書屋・岡田真	室町	戒光院
19	斯道文庫	集解一〇巻		五	092／50		後期	伝　楠河州
20	斯道文庫	集解一〇巻	欠序	三	092／51		室町	
21	斯道文庫	集解一〇巻		五	092／52		慶長一五（一六一〇）	
22	斯道文庫	集解二巻	存巻上（学而～郷党）	一	092／253		室町	

23	慶應義塾図書館	集解一〇巻	存巻一～五	一	110X／67	大鳥雅太郎（青谿書屋）	後期	主沙門顕清と朱書あり															
24	慶應義塾図書館	集解一〇巻		三	110×／249		応永六（一三九九）	箱に竹中重門旧蔵とあり															
25	東洋文庫	集解一〇巻		五	1C41	和田雲邨	後期	松平楽翁（桑名文庫）、向山黄邨															
26	東洋文庫	集解一〇巻	存巻一～五	一	1C42	和田雲邨	後期（寄合）																
27	東洋文庫	集解二巻		二	1C37	和田雲邨	後期	池田光政															
28	東洋文庫	集解一〇巻	存巻一～五	一	1C39	和田雲邨	永禄六（一五六三）																
29	東洋文庫	集解一〇巻		三	1C40	和田雲邨	後期影写正平本（巻一・一二）大永四写（巻三～一〇）	藤原貞幹、木村正辞															
30	東洋文庫	集解一〇巻		五	1C38	和田雲邨	後期																
31	成簀堂文庫	集解一〇巻	欠三・四	四	1140072	大野洒竹・寺田望南・徳富蘇峰	後期																
32	成簀堂文庫	集解一〇巻	存七子路～一〇堯曰	二	1140082	徳富蘇峰	末																
33	成簀堂文庫	集解一〇巻	欠一・二・七・八	三	1140080	徳富蘇峰	後期（享録四？）																
34	成簀堂文庫	集解一〇巻	存先進～堯曰	一	1140117	徳富蘇峰	末近世初	大林寺															
35	成簀堂文庫	集解一〇巻	同	一	1140089	徳富蘇峰	同（寄会）	天祐・宗拳															
36	成簀堂文庫	集解一〇巻		四		徳富蘇峰	後期	清見寺															
37	宮内庁書陵部	集解一〇巻		三	457／207		後期																
38	宮内庁書陵部	集解一〇巻		二	457／208		末																
39	宮内庁書陵部	集解一〇巻		五	555／131		初中期	新見正路（賜蘆文庫）															
40	宮内庁書陵部	集解一〇巻	存公冶長第五残、雍也第六残		日40		室町	海龍王寺伝来と表紙に															
41	国会図書館	集解一〇巻		一	WA16／19		室町																
42	国会図書館	集解一〇巻		二	WA16／45		室町	鹿島神宮（櫻山文庫）															

43	国会図書館	集解一〇巻		四	WA16／12		室町（巻一～五）、末近世初（巻六～一〇）（源昌勝入道徳庵）	賀茂三手文庫
44	国会図書館	集解一〇巻	存巻一～五	一	123, 83／rK	亀田次郎	永禄一（一五五八）	
45	国会図書館	集解一〇巻		二			近世初	
46	静嘉堂文庫	集解一〇巻		二				
47	都立中央図書館	集解一〇巻	欠巻九・一〇	四	青42	渋沢栄一		
48	都立中央図書館	集解一〇巻	存巻一・二	二	特6253			
49	日光山輪王寺	集解一〇巻	存巻七～一〇	一	85／2／1467		文亀二（一五〇二）	天海蔵
50	日光山輪王寺	集解一〇巻		三	85／1／1466		後期	天海蔵
51	日光山輪王寺	集解一〇巻		二	85／1／1464		後期	天海蔵
52	日光山輪王寺	集解一〇巻	欠巻一～二	四	85／1／1468		末	天海蔵、豪舜之
53	日光山輪王寺	集解一〇巻（単経）	存巻一～六	一	90／1／1886		末	天海蔵
54	日光山輪王寺	集解一〇巻		五	85／1／1465		末	天海蔵
55	史跡足利学校	集解一〇巻	存巻一～二	一	505／1		室町（九華）	九華・三要
56	史跡足利学校	集解一〇巻		五	509／1		近世初（九華本の転写か）	
57	史跡足利学校	集解一〇巻	欠巻一～四	一	505／1	近藤重藏（文化一三跋）	近世初（寒松か）	睦子
58	六地蔵寺	集解一〇巻	存巻一～四	一	戊19		後期～末	
59	六地蔵寺	集解一〇巻		二	戊8		後期	六地蔵寺宥長
60	築島裕	集解一〇巻	存巻五～六	一帖			永正一三（一五一六）	
61	某家	集解一〇巻	存巻三・四・九・一〇	二			近世初	
62	筑波大学附属図書館	集解一〇巻		五	ロ860／12	林泰輔	中期	円融蔵（梶井宮盛胤法親王）
63	蓬左文庫	集解一〇巻		五	110／18		末	
64	大国魂神社	集解一〇巻		五			前期	穂の印記

65	大阪府立図書館	集解一〇巻		五	甲和153	徳大寺家	永禄元亀頃	釈梅仙
66	阪本龍門文庫	集解一〇巻		四	230、2／7		中期	豪仙之
67	天理大学附属図書館	集解一〇巻		五	123.3／イ13	岡田真	末近世初	
68	天理大学附属図書館	集解一〇巻（単経）		二	123.3／イ15		後期	
69	天理大学附属図書館	集解一〇巻		四	123.3／イ9		室町	
70	神宮文庫	集解一〇巻		三	515	掛川文庫・林崎文庫	後期	大永三年（一五二三）林安盛、元奥書
71	神宮文庫	集解一〇巻		五	488	秋月磯氏	江戸初～前期	養齣徹定
72	神宮文庫	集解一〇巻		二	516	林崎文庫	末	
73	陽明文庫	集解一〇巻		五	近ロ22		末近世初	
74	仁和寺	集解一〇巻（単経）		二	称58		永禄一三（一五七〇）	
75	醍醐寺	集解一〇巻	存巻一～五	一			末	
76	大和文華館	集解一〇巻（単経）		二	鈴鹿文庫	鈴鹿本	末（永禄・元亀か）	
77	龍谷大学大宮図書館	集解一〇巻（単経）		二	021／21／2		後期	写字台
78	京都大学附属図書館	集解一〇巻（単経）	存巻六～一〇	一	66ロ8		中後期、清原宣賢自筆訓	清家文庫
79	京都大学附属図書館	集解一〇巻		二	66ロ5		天文五（一五七六）枝賢令写、天文八（一五七九）良雄証明	清家文庫
80	京都大学附属図書館	集解一〇巻		二	66ロ6		末近世初	清家文庫
81	京都大学附属図書館	集解不分巻（単経）		一	66ロ7		末近世初	清家文庫
82	京都大学附属図書館	集解一〇巻		五	66ロ1	谷村一太郎	元亀二（一五七一）	

右の表をご覧いただけばお解りのように、現在調査済みのものは、国内に八十二点（他に、台北に十点）を数える。斯道文庫二十一点、東洋文庫・成簣堂文庫（お茶の水図書館）・日光山輪王寺宝物殿がそれぞれ六点、国会図書館・京都大学附属図書館がそれぞれ五点、宮内庁書陵部・史跡足利学校・天理大学附属天理図書館・神宮文庫がそれぞれ三点、六地蔵寺・都立中央図書館・慶應義塾図書館がそれぞれ二点、そして、秋田県立秋田図書館・静嘉堂文庫・大国魂神社・築島裕・某家・筑波大学附属図書館・名古屋市蓬左文庫・大阪府立図書館・阪本龍門文庫・陽明文庫・仁和寺・醍醐寺・大和文華館・龍谷大学大宮図書館がそれぞれ一点を所蔵している。所蔵・巻数・存欠・冊数・函番・書写年代・より古い旧蔵者（旧蔵）・より新しい旧蔵者（新蔵）の項目にわけてみた。これを概観すれば、「経籍訪古志」まで遡ることは不可能であるが、「論語善本書影」や「大橋図書館展観目録」所載のものはほぼ追いかけることができる。ただ、永享三年写本（安田文庫旧蔵）、狩谷棭斎旧蔵室町写本（内野皎亭旧蔵）は依然として何処に所蔵されているのかが分からない。附言すれば、もう一点、昭和三十五年京都本能寺新館で開催された京都古典会の入札目録に「享禄三年清受叟写　巻一・二」とある古鈔本も現所在が知れない。

ところで、室町時代に存在した漢籍の、古刊古鈔本、並びに中国から輸入した刊本の総体はどのくらいであったろうか、という具体的な考証は為されたことがないが、現存する漢籍の状況、とりわけ、古鈔本だけに限ってみても、現存、五百点に満たない漢籍古鈔本の数を鑑みるとき、「論語」古鈔本の所在はそのうち、最も多くを占めるものであり、極端に申せば、「論語」古鈔本の実態を知ることによって、室町時代の漢学の実態を捉えることができる、とも豪語できるほどである。

更に、「論語」古鈔本の現存本の数をもって推せば、すでに隠滅した古写本の数も相当数に登るものと想像され、

室町時代の「論語」講読の隆盛を察することは容易であろう。書写時代から見れば、応永ころを中心とした室町時代前期から中期にかけてのものはやや少なきに居り、文亀・永正ころを中心とした後期の始まりから近世初頭にかけての写本が圧倒的に多いことは、単に時代が今に近いという理由だけではなく、宮中公家博士家の禁秘の学問が次第に学僧や武士などの広い知識層へと広がって行ったことを「論語」講習の実態が如実に示すものであるとも言えるであろう。とは言え、室町時代後期までの清原博士家の充実した写本の流伝も特筆するべき事実ではある。

所蔵機関別にみても「論語」講習の特徴をよく伝えている。例えば、日光山の天海蔵や足利学校の蔵書は室町時代旧来の「論語」受容をそのまま伝えるもので、仁和寺や醍醐寺、龍谷大学図書館、また、徳富蘇峰が蒐集した各寺院の旧蔵書も、室町時代の学僧の動向を物語るものである。更に、六地蔵寺や大国魂神社所蔵のものも、寺院系の学問の地方への波及を物語るものとして、興味深い。一方、京都大学附属図書館の清家文庫を中心として、斯道文庫・東洋文庫・大阪府立図書館・天理図書館・大和文華館・陽明文庫・など各所蔵機関に散在する清原博士家系統の写本は、強大な勢力を及ぼした清原家「論語」が、如何に普及と浸透を成し遂げたものであるかを物語っていよう。

しかし、こうした古典籍の散乱を防ぎ、旧来の実態を復元しようと努力したのが民間の蔵書家で、資金の投入を厭わず集められたコレクションに拠って始めて研究が可能となったのであることを忘れてはならない。明治時代以来の漢学の開拓者であった、根本通明（一八二二～一八七三）・林泰輔（一八五四～一九二二）、島田篁邨（一八三八～一八九八）、蔵書家であった安田善次郎（一八七九～一九三六）、和田雲邨（一八五六～一九二〇）、徳富蘇峰（一八六三～一九五七）、岡田真、渋沢栄一（一八四〇～一九三一）、大島雅太郎（一八六八～一九四八）、谷村一太郎（一八七一～一九三六）などによってつけられた道であったと言えよう。とりわけ、安田善次郎の安田文庫（「安田文庫蒐

集古鈔本『論語集解』について」拙著・前述参照）、和田雲邨の蒐集した岩崎文庫（「岩崎文庫貴重書解題Ⅰ」東洋文庫・平成二）、徳富蘇峰の成簣堂文庫（新修成簣堂文庫善本書目）川瀬一馬編・お茶の水図書館・平成四）の果たした役割は大きい。また、根本通明は自蔵の古鈔本によって、「論語講義」（早稲田大学出版部・明治三十九）を著し（「根本通明蔵書紀略」拙著・斯道文庫論集三十八・平成十六参照）、林泰輔は「論語年譜」（大倉書店・大正五）を著した。いちいちの蔵書家については後述に譲るが、テキストの分類もさることながら、所蔵者による分類は更に大きな意味を持つことをここに強調しておきたい。

第二章　室町時代古鈔本「論語集解」テキスト類型化の試み

そもそも古写本の存在はそれ自体をそのままに捉えることが最も肝要で、それを類型化して分類することは、後学の恣意に属し、ややもすれば牽強付会によって、本来の古写本の価値を歪めることも生じてしまう危険があることは、拙論「旧鈔本趙注孟子校記」（斯道文庫論集二十四・二十六・平成一・三）の前言に述べた。しかしながら、これほど多く存在する室町の古鈔本「論語」を理解するには、それぞれが如何なる学術の源流を汲んで成立したものかを把握することが緊要であり、今、敢えて恣意の誹りを顧みず類型化を試みることとした。

そこで、「孟子」の場合と同じく、始めに清原家の清家本とそれ以外のものに分けることとした。「孟子」もそうであるが、やはり、清家伝来本とそれ以外とでは字句の異同において一線を画するものがある。更に、それ以外の伝本について見れば、序論で述べた「正平版論語」「論語義疏」の影響下にあると推測されるものが存在する。従って、

現存本をこの何れの系統に属するかを推定分類し、各本の源流を総括してみたいと思う。

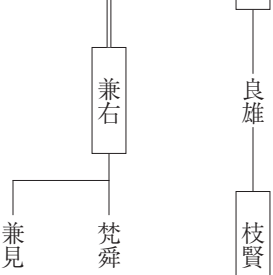
第一節　清原家伝来本

室町時代の清原博士家の経学は中興の祖・清原宣賢によって大成され、それは、大陸から新渡来のテキストを積極的に導入して、鎌倉時代以来の家学を刷新し、新たな家本を校訂するものであった。室町時代にあって、宣賢以前に書写された清家本「論語」の面影を遺すものは発見されておらず、かろうじて、斯道文庫蔵本（092／4）に、正長一・二年（一四二八）に清家本によって移点したとする本奥書を存する伝本があるが、その移点も清家本の実態を示すものかどうかは疑わしい。宣賢の「論語」学の定本は永正九年（一五一二）・十七年の奥書を有するテキストで、九年は宣賢三十七歳である。宣賢の自筆写本は現存せず、近親の者に書写せしめ、自ら訓点を施した単経本が京都大学附属図書館に所蔵される（存巻六～十）（66ロ8）。永正九年のテキストは転写本が幾つか存し、同大学附属図書館蔵本（66ロ6）、神宮文庫蔵本に二部（大永八年＝1528林宗二本奥書本・515、養鸕徹定旧蔵本・488）、大阪府立中之島図書館蔵本（釈梅仙旧蔵・甲和153）、東洋文庫蔵本（天文二十年＝1551枝賢奥書本・1c41）である。今、これらをまとめて甲種と名付けることとする。

次に、宣賢の学問を忠実に受け継いだ枝賢（一五二〇～一五九〇）、兼右（一五一六～一五七三）、釈梵舜（一五五三～一六三二）による写本の一群である。だいたい天文年間～天正年間（一五三二～一五九一）ころの活動に属する。これに相当する現存本は、斯道文庫蔵本（枝賢の門、三十郎盛政写本・091／10）、東洋文庫蔵本（前記永正宣賢本奥書本・1c41）、天理大学附属天理図書館蔵本二本（伝吉田兼右筆・123・3／イ13、同じく伝吉田兼右筆単経本・123・3

／イ15)、京都大学附属図書館蔵本（天文五年＝1536枝賢令写、天文八年＝1539良雄証明本・66ロ5）同大学附属図書館谷村文庫本（元亀二年＝1571釈梵舜写本・66ロ1）である。今、これらをまとめて乙種と命名することとする。

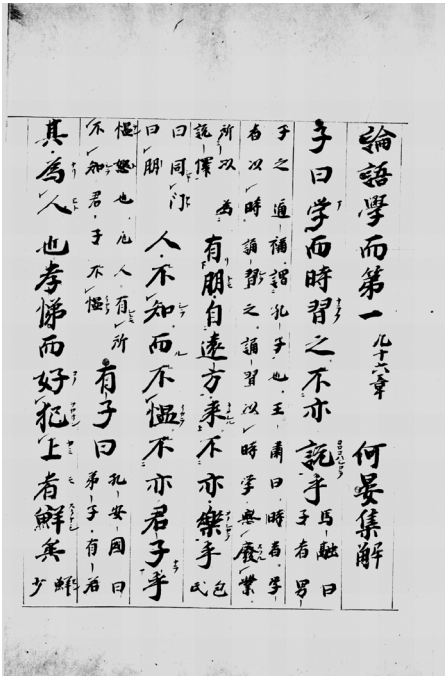
また、字様風格字句の面から、明確に断定はできないが、この枝賢・兼右鈔本の周辺に位置するものに、陽明文庫蔵本（近ロ21）、大和文華館蔵本（鈴鹿文庫単経本）、斯道文庫蔵本（伏原家本・091／66）、斯道文庫蔵本（戒光院旧蔵本・092／49）、仁和寺蔵本（永禄十三年＝1570写単経本）、斯道文庫蔵本（正長一年＝1428本奥書本・092／4）、京都大学附属図書館蔵本（宣光所持本・66ロ7）、龍谷大学大宮図書館蔵本（写字台単経本・021／21／2）がある。これらは漠然とした字様などからの判断で、何ら明確な根拠は無いが、全体を見渡した観点から浮き上がる類似性は書誌学上最も有力な手がかりとなるものである。



ここで、宣賢以後の室町時代学統の系譜を簡単にまとめておこう。宣賢は吉田神社の神官吉田兼倶（一四三五～一五一一）の三男で清原宗賢（一四三一～一五〇四）の養子である。宣賢の子に良雄（一四九九～一五六六・始め業賢という）があり、次子兼右は吉田兼満の養子となった。良雄の子、枝賢は明経博士となり、兼右の子に釈梵舜と吉田兼見（一五三五～一六一〇）があった。つまり、枝賢と梵舜は従兄弟にあたり、枝賢と兼右は甥と叔父にあたる。年令的には枝賢・兼右

が近く、宣賢家伝のテキストは、枝賢・兼右に主として受け継がれ、梵舜はそのいずれからも吸収し得た、と思われる。清原家・吉田家ともにこのころは類似した同系統のテキストを用いているのが特徴で、字様も頗る似通ったもので統一されている。室町時代清原家「論語」学の最後の黄金時代を築いた人々である。

ところで、漢籍における古写本の成り立ちは、底本を忠実に写すのが原則で、さまざまな校訂を経ながらも型を崩さないという、ある種のエキスを遺しながら続いていくという本質を持つ。「論語」のテキスト間における最も大切なエキスである型は、その題・篇名の記し方にある。これは「論語」に限ったことではないが、単純な要素でありながら、分類上重要な目安となる。即ち、清原家本の題し方は次のようになっている。

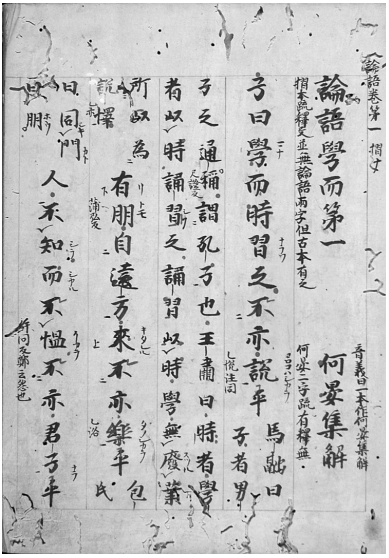

論語學而第一　凡十六章　何晏集解
子曰学而時習之不亦説乎馬融曰子者男子之通稱孔子也王肅曰時者學者以時誦習之誦習以時學無廢業所以為説懼曰同門
有朋自遠方来不亦樂乎包氏曰朋人不知而不慍不亦君子乎慍怒也凡人有所不知君子不慍
有子曰孔安國曰弟子有若其為人也孝悌而好犯上者鮮矣鮮少

甲種の巻一巻頭の一葉
（大阪府立中之島図書館蔵本）

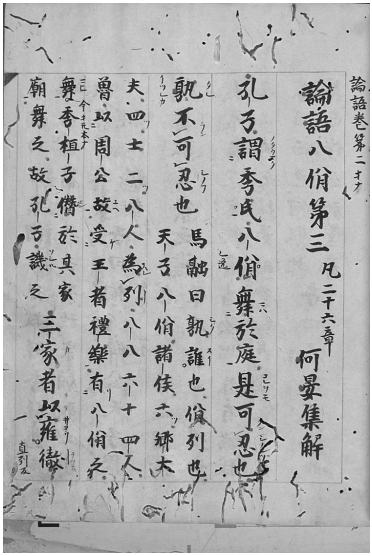
「論語学而第一　　凡十六章　　何晏集解」

つまり、篇名があり、撰者があり、その中間にやや小さい字で「凡幾章」という章数を組み入れるのである。これが全篇をつうじて貫かれている。

勿論、枝賢等の写本である乙種もこの原則は守られるが、不思議と、「学而第一」のみ章数を欠き、第二以降この原則が貫かれる。現存五本とも同様に作ることは、初期の底本の書き忘れなども忠実に遺した可能性があり、



乙種（三十郎本）の巻一巻頭



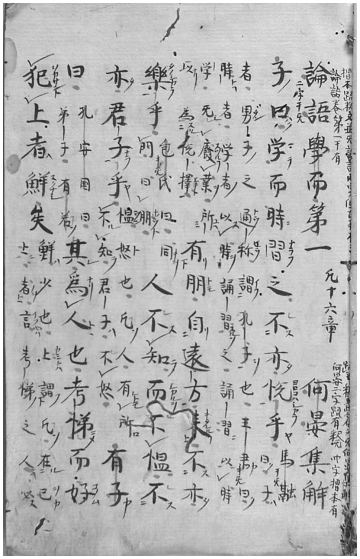
巻二巻頭

古写本の成立事情を良く物語る例であろう。

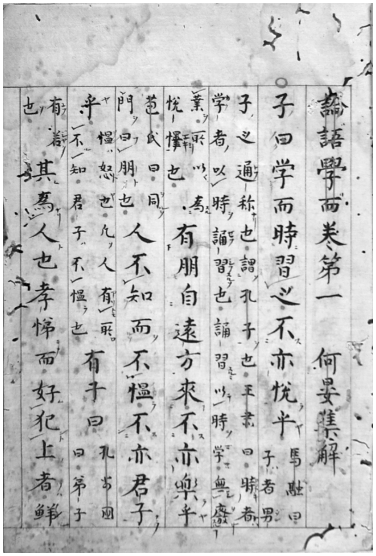
他に、一本、京都醍醐寺所蔵のテキスト、巻一から五の零本で、字句の系統は明らかに清家本系統に属するが、字様その他、甲・乙つけがたいものが存する。室町後期の緇流でかなり高い地位に在った者か、博士家の「論語」を学んだ形跡を示している。こうした伝本の存在は、当年の「論語」受容を知る重要な資料であろう。

さて、乙種の周辺に位置するものはどうであろうか。これには甲種のように章数を撰者の上に記すもの《斯道文庫蔵本（伏原家本・091／66）、斯道文庫蔵本（戒光院旧蔵本・092／49）、仁和寺蔵本（永禄十三年＝1570写単経本）》と、《斯道文庫蔵本（正長一年＝1428本奥書本・092／4）、京都大学附属図書館蔵本（宣光所持本・66ロ7）、龍谷大学大宮図書館蔵本（写字台単経本・021／21／2）》のように、章数を削除して記さないものがある。ここに、前者を総称して丙種と名付け、後者を総称して丁種と名付ける。

こうして、正統な清家本とやや変化を取り入れた清家本と、



丙種（戒光院本）の巻頭



丁種（正長本）の巻頭

甲から丁まで四種類に分かつことができるのであるが、本文の系統もやはり変化を来し、「学而第一」の「学而時習之、不亦説乎＝学んで時に習う、また、よろこばしからずや」の一文、「よろこぶ」を清家本は「説」につくるが、丙・丁本は「悦」に作るのである。これは後述のように正平版や義疏本に見られる字句の変化であり、清家禁中の家本が次第に流布本と交錯していく姿を垣間見るようである。

更に、はっきりとこれらの分類に分けることには躊躇するが、この流れを汲むのではなかろうか、と推測されるものに、大国魂神社蔵本の甲種、成簀堂文庫蔵本（大林寺本・1140117）の丙種、日光山輪王寺蔵本（単経本・90／1／1886）の丁種が挙げられる。

以上の特徴を整理し、甲から丁までの現存本を表にすると、次のようになる。（最後の項目の「字数」は尾題に附される経注大小字数の有無を示し参考までに加えた）

〈甲種〉

No.	所蔵	函番		種別	章数		行字	字数
65	大阪府立図書館	甲和153	清家本	「説」	有（上）	甲	7×14	有
70	神宮文庫	515	清家本	「説」	有（上）	甲	7×14	有
71	神宮文庫	488	清家本	「説」	一部有（上）	甲	7×14	有
78	京都大学附属図書館	66ロ8	清家本	「説」	なし	甲	7×15	
80	京都大学附属図書館	66ロ6	清家本	「説」	有（上）	甲	7×14	有
64	大国魂神社			「説」	巻1のみ有（上）	甲か	4×11	有
75	醍醐寺		清家系	「説」	有（上）	甲か乙か	7×17	有

〈乙種〉

No.	所蔵	函番		種別	章数		行字	字数
4	斯道文庫	091／10	清家本	「説」	有（上）、学而なし	乙	5×14	有
25	東洋文庫	1C41	清家本	「説」	有（上）、学而なし	乙	7×14	有
67	天理大学附属図書館	123．3／イ13	清家本	「説」	有（上）、学而なし	乙	7×14	有
68	天理大学附属図書館	123．3／イ15	清家本	「説」	有（上）、学而なし	乙	7×16	
73	陽明文庫	近ロ22	清家本	「説」	有（上）、学而なし	乙	7×14	有
76	大和文華館	鈴鹿文庫	清家本	「説」	なし	乙	7×14	
79	京都大学附属図書館	66ロ5	清家本	「説」	有（上）、学而なし	乙	7×14	有
82	京都大学附属図書館	66ロ1	清家本	「説」	有（上）、学而なし	乙	7×14	有

〈丙種〉

No.	所蔵	函番		種別	章数		行字	字数
7	斯道文庫	091／66	清家本	「悦」	有（上）	丙	8×13	有
18	斯道文庫	092／49	清家本か	「悦」	有（上）	丙	8×13	有
74	仁和寺	称58		「悦」	有（上）	丙（乙の一か）	8×14	
34	成簀堂	1140117			有（上）	丙か	7×17	有

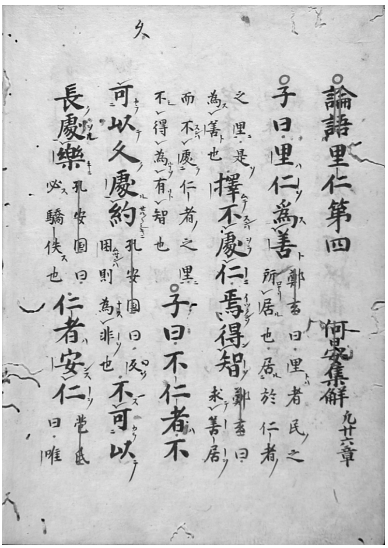
〈丁種〉

No.	所蔵	函番		種別	章数		行字	字数
13	斯道文庫	092／4	清家本	「悦」	なし	丁	7×14	なし
53	日光山輪王寺	90／1／1886	清家系か	「悦」	なし	丁（乙の一か）	8×15	
77	龍谷大学大宮図書館	021／21／2	清家本	「悦」	有（下）	丁（乙の一か）	8×12	なし
81	京都大学附属図書館	66ロ7	清家本	「悦」	なし	丁（乙の一か）	8×16	

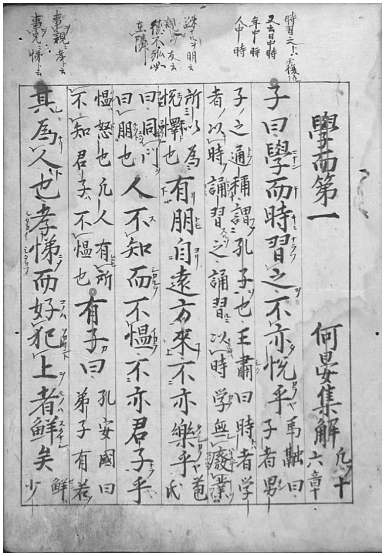
第二節　正平版「論語」の影響を蒙る古鈔本「論語」

正平版が正平十九年（一三六四）に日本で初めて出版された「論語」であることは前述した。しかし、その後、何度か覆刻を繰り返し、室町時代を通じて持て囃されたことも前述した。秘本が世に公開されたことは「論語」講読を願う学徒にとってこの上ない朗報であった。正平十九年（一三六四）、応永頃（十五世紀初頭・室町時代前期）、応仁文明頃（十五世紀後半・室町時代中期）、明応八年（一四九九）、天文年間（十六世紀半ば・室町時代後期）の各期間に重版・重印を繰り返していったことも前述した。従って、この機運が古写本の成立に影響を及ぼさぬ筈はなく、正平版を元にして影写や転写が重ねられていくことは当然のことであった。それは、版本が手に入らないから写本を作るというだけの単純な解釈では収まりがつかないのであって、そこには様々なテキストの要素が入り交じってくるという複雑な古写本成立事情を念頭におかねばならないことは何度も強調するところである。

先ず、全く忠実に正平版を影写したテキストが存在する。斯道文庫蔵本（青蓮王府旧蔵・092／2）同（応永三十三年写本・092／5）、都立中央図書館蔵本（渋沢栄一旧蔵・青42）、筑波大学附属図書館蔵本（円融蔵・ロ860／12）、東洋文庫蔵本（木村正辞旧蔵本の巻一～二・1c40）がこれに相当する。いずれも室町時代前期から中期と思われる書写に係り、筑波大本は正平版の単跋本の跋文までも移写しており、文明時代を中心とする室町時代中期の正平版隆盛に伴った影写本と考えられる。また、例えば、斯道文庫蔵本の応永三十三年鈔本などは、周防の国で書写されたもので、大内氏の文化事業を担うものと想像され、字句も極めて正平版に類似し、訓点も厳格な清家点とは言えないことなど（「安田文庫蒐集古鈔本『論語集解』について」〈前掲〉を参照）、正平版の影響が、博士家とは異なった場で、なお地



戊類（青蓮院本）



己類（伝楠河州本）

方へも波及していったことを伺わせる伝本である。これらを今、分類して戊類と名付ける。

図を以てしても明らかなように、影写正平版のテキストは、清家本と異なり、巻頭題の章数が撰者魏何晏集解の下に置くのが特徴で、

「論語里仁第四　何晏集解　凡二十六章　」

なおかつ「学而第一」の「学而時習之、不亦説乎」、「説」の字を「悦」に作るのが特徴である。書式（行字数）も正平版に同じである。

さて、この特徴を以て、現存の古鈔本を見るとき、非常に多くの伝本が、正平版の忠実な写しとは言えないが、この特徴を体していることが分かるのである。十六点の伝本、欠本などで推定も含めると実に十九点の伝本がこの型を踏襲する。しかしながら、これら一つ一つの伝本は、正平版とは字句の異同からも、戊類に属する伝本とは一線を画するものがある。また、書写年代も、影写正平版本よりも降った、文亀永正から後の、室町時代中期から後期にかけての

〈戊種〉

No.	所蔵	函番		種別	章数		行字	字数
12	斯道文庫	092／2	影正平版	「悦」	有(下),学而なし	戊	6×13	有
14	斯道文庫	092／5	正平系か	「悦」か	有（下）	戊	6×13	有
47	都立中央図書館	青42	影正平版	「悦」	有（下）	戊	6×13	有(巻2・3なし)
62	筑波大学附属図書館	ロ860/12	影正平版	「悦」	有（下）	戊	6×13	有
29	東洋文庫	1C40	正平系か	「悦」	有（下）	巻1・2戊、他己	6×13	有

〈己種〉

No.	所蔵	函番		種別	章数		行字	字数
1	秋田県立秋田図書館	特／263	正平系か	「悦」	有（下）	己	8×17	有
6	斯道文庫	091／12	正平系か	「悦」	有（下）	己	7×20	巻1のみ有
8	斯道文庫	091／67	正平系か	「悦」	有（下）	己	6×16	有
10	斯道文庫	091／220	正平系か	「悦」か	有（下）	己	8×20	有
11	斯道文庫	092／1	正平系か	「悦」	有（下）	己	7×13	有
15	斯道文庫	092／8	正平系か	「悦」	有（下）	己	7×不等	有
19	斯道文庫	092／50	正平系か	「悦」	有（下）	己	7×14	有
24	慶應義塾図書館	110X／249	正平系か	「悦」	有（下）	己	7×14	有
26	東洋文庫	1C42	正平系か	「悦」	有（下）	己	7×20	有
43	国会図書館	WA16／12	正平系か	「悦」?	有（下）	己	9×16	有
44	国会図書館	123，83／rk	正平系か	「悦」	有（下）	己		有
45	国会図書館		正平系か	「悦」	有（下）	己	6×13	有
46	静嘉堂文庫		正平系か	「悦」	有（下）	己		
49	日光山輪王寺	85／2／1467	正平系か		有（下）	己	8×14	有
60	築島裕		正平系か		一部有(下)	己	7×16	なし
61	某家		正平系か	「悦」	有（下）	己	7×15	有
32	成賓堂	1140082	正平系か		有（下）	己か	7×14	有
35	成賓堂	1140089		「悦」か	有（下）	己か	7×14	有
66	阪本龍門文庫	230、2／7	影正平版か	「悦」	有(下),学而は上	己か	7×13	有

ものが多いのも変化を含む伝本の特徴であろう。具体的には、校勘篇を参照いただくが、また、これら伝本それぞれの間にも字句の異同は存し、一類に纏めるのにはやや躊躇されるが、清家本とは全く違う系統を示し、これら一群の伝本は正平版の影響を強く蒙ったものである、と推定する。ただし、後述の「論語義疏」の影響を蒙る伝本との関係も考えられるが、錯綜する伝本の成り立ちは簡単ではないということであろう。ここに、この伝本を総称して己類とする。

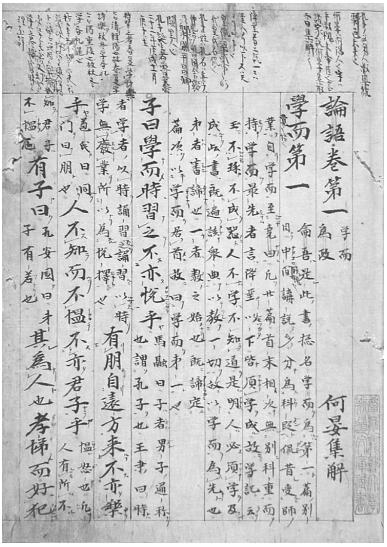
己類は、秋田県立秋田図書館蔵本（根本通明旧蔵・特263）、斯道文庫蔵本（天正十八年単経本・091／12）、同（091／67）、同（091／220）、同

（永禄三年写本・092／1）、同（天文十八年写本・092／8）、同（伝楠河州写本・092／50）、慶應義塾図書館蔵本（応永六年写本・110X／249）、東洋文庫蔵本（永正十二年奥書本・1c42）、同（大永四年鈔本・1c40の巻三～十）、成簣堂文庫所蔵本（1140082）同蔵本（天祐旧蔵本・1140089）、国会図書館蔵本（賀茂三手文庫旧蔵・wa16／12）、同（永禄一年鈔本・123・83／rk）、同蔵本（室町末近世初写本）、静嘉堂文庫蔵本、日光山輪王寺蔵本（文亀二年鈔本・85／2／1467）、築島裕氏蔵本（永正十三年写本）、某家蔵本、阪本龍門文庫蔵本（230・2／7）が挙げられる。

以上、戊己類の現存本を表にすると、右のようになる。

第三節　「論語義疏」の影響を蒙る古鈔本「論語」

序編の第二章に述べた室町時代の「論語義疏」の存在は、「正平版論語」よりも露骨に「論語集解」に影響を及ぼした。即ち、前述のように、各篇の首題の下に「義疏」の疏文が添えられているテキストが多々存在し、それは例えば、「学而第一　疏」とあり、以下小字双行にて「論語是此書總名学而為第一第篇別目……故曰学而第一也」と「学而」篇の意義と総括を示す一文を篇題の下に加えているのである。要するに、「義疏」中の、各篇の意義と総括を示す一文が、「集解」単行本の、全ての篇にそのまま挿入されているわけである。しかしながら、このテキストは依然として本文が集解本で、しかもその注釈内には「義疏」の疏文が混入することは無い。従って、形から見れば、「論語義疏」から「疏文」のみを削除したテキストであるとの解釈も可能なのであるが、それは妥当な推測かどうか、なんとも言えない。どちらかと言えば、私は、やはり、「集解」本に疏文が付加されたと見るのが自然ではなかろうか、と思っている。

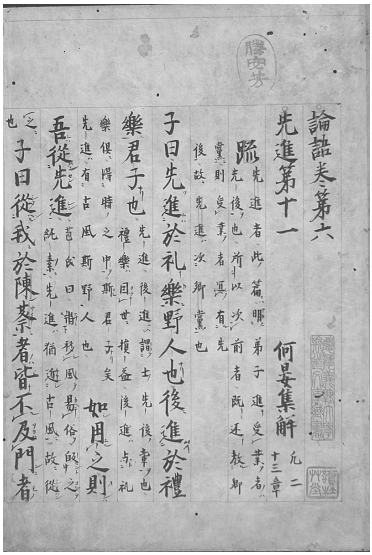


論語卷第一　何晏集解

學而第一

子曰學而時習之不亦悅乎有朋自遠方來不亦樂乎人不知而不慍不亦君子乎

有子曰其為人也孝弟而好犯



論語卷第六

先進第十一　何晏集解

子曰從我於陳蔡者皆不及門者

辛類、（勝海舟本）

庚類、（舜政本）

更に、このテキストは、篇題の型から見て、二種類に分かれるのである。それは、章の数を示す章数があるものと無いものとである。ここで、章数の無いものを庚類と名付け、章数の有るものを辛類と名付けることとする。こうした単純とも思える型による分類が何故これ程までに意味を持つものなのか。庚類は総じて何晏の「集解序」を欠く特徴がある。

庚類に属するものは、斯道文庫蔵本（林泰輔旧蔵本・091／9）、同蔵本（島田篁邨旧蔵・091／11）、同蔵本（文明頃写単経本・091／68）、同蔵本（舜政禅師写本・092／51）、東洋文庫蔵本（池田光政旧蔵本・1c37）、同蔵本（永禄六年写本・1c39）、成簀堂文庫蔵本（大野洒竹旧蔵本・1140072）、同蔵本（享禄四年写本・1140080）、同蔵本（清見寺旧蔵本）、宮内庁書陵部蔵本（賜蘆文庫旧蔵・555／131）、国会図書館蔵本（wa16／19）、都立中央図書館蔵本（特6253）、日光山輪王寺蔵本（85／1／1466）、同蔵本（85／1／1464）、史跡足利学校蔵

〈庚種〉

No.	所蔵	函番		種別	章数		行字	字数
2	斯道文庫	091／6		疏鼠入	なし	庚	8×16	有
3	斯道文庫	091／9		疏鼠入	なし	庚	9×20	なし
5	斯道文庫	091／11	足利学校系か	疏鼠入	なし	庚	9×20	なし
20	斯道文庫	092／51		疏鼠入	なし	庚	9×20	なし
27	東洋文庫	1C37		疏鼠入	なし	庚	9×20	一部有
28	東洋文庫	1C39		疏鼠入	なし	庚	8×13	なし
31	成簀堂文庫	1140072		疏鼠入	なし	庚	8×16	有
33	成簀堂文庫	1140080	足利学校系	疏正義鼠入	なし	庚	8×20	なし
36	成簀堂文庫			疏鼠入	なし	庚	7×20	巻9のみ有
39	宮内庁書陵部	555／131		疏鼠入	なし	庚	8×16	
41	国会図書館	WA16／19	足利学校系	疏鼠入	なし	庚	9×20	なし
48	都立中央図書館	特6253		疏鼠入	なし	庚	9×16	
50	日光山輪王寺	85/1/1466		疏鼠入	なし	庚	9×20	有(巻10のみあり)
51	日光山輪王寺	85/1/1464		疏鼠入	なし	庚	8×16	なし
56	史跡足利学校	509／1	足利学校系	疏鼠入	なし	庚	7×16	有
57	史跡足利学校	505／1	足利学校系	疏鼠入	なし	庚	9×16	なし
69	天理大学附属天理図書館	123・3／イ9		義疏鼠入	なし	庚	9×16	なし
72	神宮文庫	516		疏鼠入	なし	庚	8×16	なし
9	斯道文庫	091／68		「悦」	なし	庚か	不等	なし

〈辛種〉

No.	所蔵	函番		種別	章数		行字	字数
16	斯道文庫	092／9		疏鼠入	有（下）	辛	×14	有
17	斯道文庫	092／16		疏鼠入	有（下）	辛	8×20	有
21	斯道文庫	092／52		疏鼠入	有（下）	辛	8×14	有
23	慶應義塾図書館	110X／67	足利学校系	疏鼠入	有（下）	辛	9×20	有
30	東洋文庫	1C38		疏鼠入	有（下）	辛	8×15	有
37	宮内庁書陵部	457／207		疏鼠入	一部有	辛	8×17	なし
42	国会図書館	WA16／45	足利学校系	疏鼠入	一部有(下)	辛	8×15	有
52	日光山輪王寺	85/1/1468		疏鼠入	有（下）	辛	6×12	一部有
54	日光山輪王寺	85/1/1465		一部疏鼠入、「悦」	有（下）	辛	7×15	巻2のみ有
55	史跡足利学校	505／1	足利学校系	疏鼠入	有（下）	辛	8×16	
58	六地蔵寺	戊19		疏鼠入	一部有(下)	辛	7×17	一部有
59	六地蔵寺	戊8		疏鼠入	一部有(下)	辛	9×20	有

本（509／1）、同蔵本（寒松写か・505／1）、天理大学附属天理図書館蔵本（123・3／イ19）、神宮文庫蔵本（林崎文庫旧蔵・516）の十九伝本である。

また、一方、辛類に属するものは、斯道文庫蔵本（勝海舟旧蔵・092／9）、同蔵本（092／16）、同蔵本（慶長十五年写本・092／52）、慶應義塾図書館蔵

本（大島雅太郎旧蔵本・110X／67）、東洋文庫蔵本（1c38）、宮内庁書陵部蔵本（457／207）、国会図書館蔵本（櫻山文庫旧蔵・wa16／45）、日光山輪王寺旧蔵（豪舜之本・85／1／1468）、同蔵本（85／1／1465）、史跡足利学校蔵本（九華写本・505／1）、六地蔵寺蔵本（戊19）、同蔵本（宥長旧蔵本・戊8）の十二伝本である。

以上、庚辛類の現存本を表にすると右のようである。

また、以上第三節まで述べた分類を、もう一度、簡略に図式化すると次のようになる。カッコ内は図版に用いた伝本。

- 清家本
  - 宣賢本……甲類（大阪府図梅仙本）
  - 枝賢系本……乙類（三十郎本）
  - 章数有（上）……丙類（戒光院本）
  - 章数無……丁類（正長本）
- 正平版系
  - 影写本……戊類（青蓮院本）
  - 転写本……巳類（楠河州本）

義疏系
- 章数無……庚類（舜政本）
- 章数有（下）……辛類（海舟本）

総じて見ると、第三節に記す「論語義疏」の影響を蒙ったテキストが数量的に最も多く伝存し、この事実は、清家本や正平版系の写本よりも、転写される機会が多く存在したことを示すものと考えられるであろう。また、その庚・辛類は、書写年代もほぼ室町時代後期に属し、あるいは、この伝存量の多さは、時代的な流行と言う要因を考慮に入れる必要があるのかもしれない。それは、つまり、中世後半期において、学術界に大きな影響力を持った、関東の足利学校の動向に注意する必要があるということである。

足利学校の学問については、川瀬一馬「増補新訂　足利学校の研究」（講談社・昭和四十九）に詳しい。足利学校は創設が平安時代とも鎌倉時代とも言われる関東における最古の教育機関で、主に儒学の伝導を中心に活動していたが、その明確な活動の実態が知れるのは室町時代中期、永享年間（一四二九～一四四〇）に上杉憲実が快元を庠主に迎え、同十一年に宋版の「書」「詩」「礼」「左伝」の四経と学田を寄進、また、同じ頃、上杉憲忠による宋版「易」の寄進などによる上杉氏の庇護に始まる。学校はこれによってその名を天下に知らしめる養成所となったのである。その教育理念は武家社会並びに、それと相表裏する学僧の知識要求に応えるべく、広く儒学一般の読書を経て応用性ある教養を身につけることにあったから、特に「易」や「六韜」など戦国の世に威力を発揮する学問に力が入っていた。川瀬博士の論攷によれば、室町時代の学校の学問をその蔵書をもって時代区分をすると、第一期が永享～応仁の頃（一四二九～一四六七）で庠主快元の時代、第二期が応仁～大永（一四六七～一五二七）、第三期が大永～天正頃

天正写本「黄石公三略」（091／80）（巻頭・巻末）

（一五二一～一五九一）で庠主九華の時代に分かれると言う。既に、多くの書物が流出していることから、学校の学問の復元はまだまだ研究が必要であるが、学校に現存する文献から推定するこうした学統は恐らくは事実を物語っていることと思われる。例えば、「論語集解」に関しては、九華自筆の零本が二部（存巻一～二と存巻五～十の二部）とその写しが一部遺るに過ぎない。しかし、この零残のなかに、充分、当年の足利学校の「論語」講習の本質が遺されていると考えられるのである。

学校に学ぶ者は先ず、講習の元となるテキストを写し、写本を作ることから始めねばならない。そして、そのテキストに師説を細かに書き入れる。時には、本文が見えなくなるほど行間に、上下の余白に注釈を書き込む。本文の匡郭の上部に数糎の空白を設け、更に天の上限に欄線を引き、上層を作るのである。これは学校系の写本の特徴で、この形式は全国に波及することになるのである。上図の「黄石公三略」に見るように、足利学校にて記された写本は、書

眉・行間・遊紙に所せましと講義録が加えられるのである。

学校は寄宿舎があるとはいえ、部屋に限りもあり、学習者は近隣の寺院や民家に滞在し、底本を借りて写し講義に参加したもので、「三略」の写本の奥書はそのことを物語っている。

このように、むしろ、足利学校系の写本は、学校で学んで持ち帰る写本が多くを占める訳で、それが全国に散在しているのであるから、実態を把握するのは困難を極める。中世後半期は京都や鎌倉の五山にて禅林の漢籍読習が隆盛であったが、その読習の特徴であるテキストへの満紙書き入れの方法を併せ見るとき、都や地方を結んで往来する学僧・武士の、求学の精神を先ず理解しなければ、室町時代の書物文化を理解することはできないと思われるのである。

「論語集解」の古鈔本にあっても、書式や字様などから、学校系の写本と判断されるものも幾つかを存する。国会図書館蔵本の二本（wa16／19、wa16／45）は、いずれも奥書を存しないが、明かに学校系のものである。特に、前者（19）は書き入れに朱点で学校系特有の記号を含み、「昺曰」（宋邢昺の「論語注疏解経」）、「疏曰」（「論語義疏」）、「集注」（宋朱熹の「論語集注」）などを周密に書き入れ、新しい注釈を積極的に取り入れている学校の姿勢も伺える。成簀堂文庫蔵本（享禄四年写本・1140080）もこの類である。他に、都立中央図書館蔵本（特6253）、日光山輪王寺蔵本（85／1／1466）も字様が学校系の特徴を伝えている。輪王寺の天海蔵に係るものは、天海が永禄三年（一五六〇）から四年間足利学校に滞留していることから、蔵本にその影響が見られるのは首領されるところである。更に、斯道文庫蔵本（091／11）も同様、また同蔵本（092／51・庚類図版参照）は、最も学校本に近い風格を持ち、附添する由来記に、「天海舜政禅師伝記」があり、舜政禅師の所持本であったことを伝えている。それによれば、禅師は、米沢の人で、今茨城県城里町にある曹洞宗龍谷院の開山、秀峰宗岱に師事し、後、常州大寧寺（今、八郷町の泰寧寺か）

の第一世となり、更に野州に入り、益子入道睦虎居士がその弟子となり精舎を建立して鶏足と名付け、禅師が開山となった。今の足利市にある鶏足寺とは違うようであるが、いずれにせよ、足利近辺に住職となった僧侶であると伝えられる。大永七年（一五二七）六十歳で寂するという。然らば、その所持本とされるのは、本書が風格上、足利学校系の写本と推定されることと事実関係が一致するのであって、学校周辺において相当数の写本が作られたことを想像せしめる伝本であると言えよう。

さて、「論語義疏」は学校にとって、また特異なものとして歴史の中に刻まれることとなったのであるが、それは、江戸時代根本遜志が学校の「義疏」を元にして、「論語集解義疏十巻」を寛延三年（一七五〇）に出版、中国で既に滅んだ幻の「義疏」を世に送り、「四庫全書」にも収載される快事となったことによるのであるが、以後は「義疏」と言えば足利学校とのイメージを作り出すこととともなった。実際には、九行二十字の十冊本一点が現在、史跡足利学校に所蔵されるに過ぎないが、その書写年代も庠主九華の時代と推定されており（川瀬博士による）、つまり、永禄を中心とした（一五五八～一五六九）頃の書写であろう。勿論それよりも古い写本も存在したことと思われるが、或いは、九華の時代が最も盛んに「義疏」講習がおこなわれたと考えるべきなのかも知れない。

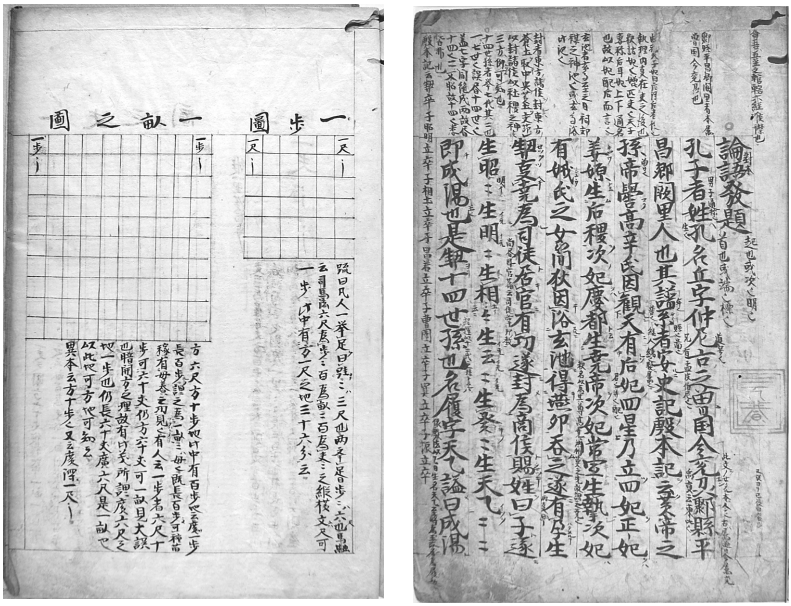
斯道文庫に所蔵される古鈔本「論語義疏」を見ると、芳郷光隣手沢本（091／13）も足利学校系の風格を持つ。光隣は東福寺宝勝院に住し、天文五年（一五三六）没したが、かつて足利に学んだことがあり、本写本も文亀永正頃（十六世紀初頭）の書写と思われ、学校の影響は充分に考えられる。また、文明十九年（一四八七）写本（092／6）は、「江州山上、曹源寺の意足庵にて二十五歳の周篤が書き写した」という奥書が随所に見られる。その後、本書は周防山口大内氏の有に帰していた。江州曹源寺が何れの寺院であるかを審にしないが、字様に足利系の風格を見て取

「論語義疏」（092／７）

れるのである。奥書にも底本は「周鈞蔵主之本」であると記し、足利系の写本であった可能性は充分に考えられる。もう一本、稲田福堂の旧蔵本（092／7）は（図を参照）、これらよりやや書写年代が降る天文から後のものと推定するが、墨色濃厚で筆画に力有り、まさに足利学校系の字様と言えよう。書式もそれに相当し、学校周辺の産物と見てまず疑いはなかろう。そして、これら三本がいずれも毎半葉九行、行二十字の款式を守ることも興味深いが、巻頭の書式などは、現存の史跡足利学校蔵本とはやや異なり、「義疏」にもいくつかの写本の系統があったことを想像せしめる。

「義疏」のテキストの問題については別に論攷を立てるとして、ここでもう一つ注意しなければならないことは、室町時代における「論語発題」などの邦人注釈の風潮である。このことについては、前掲、阿部隆一「室町以前邦人撰述論語孟子注釈書考」（斯道文庫論集第二輯・昭和三十八）に詳細で、「義疏」が注釈の性格上、当年に歓迎された理由もそこに明らかにされていることも前述した。

要するに、室町時代を風靡した学問の形態であった、「講説」の為に、より基本的な知識から解説できる詳細な注解が必要とされたことが「義疏」流行の主な要因であったが、「義疏」以後の注釈である宋の邢昺「論語正義」はあまり用いられなかった。それは、「正義より義疏を愛用したのは、後者が古くから伝わって親しみがあったのと、正



「論語発題」

義が普及し始めた頃には朱熹の注が伝わり、寧ろ新注の方に漸次魅力をひかれたのが、その理由の最たるものであろう」（前掲阿部論文）。そして、講義のための簡便な「論語」解説書の類が次第に形となって流行するに至り、曼殊院蔵の「論語総略」（鎌倉期）を最も古いものとして、室町時代には、「論語発題」「論語私集」「論語私車」などの解題書が成立したのであった。とりわけ、「論語発題」は「当時論語注釈の代表的な集解・義疏・集注の三序を中心とし、それに孔子の伝記と「論語」解題に必要な図を添え、要するに「論語」の全貌と要綱を読者に会得せしめるのが、編者の編集趣旨で」（前掲阿部論文）あった。

さて、その「発題」の成立に関して、庚類に属する、国会図書館蔵本（wa16／19）「論語集解」には、巻初に「論語発題」を四丁附していて、これを、阿部博士は、足利学校庠主九華の自筆と捉え、また、同じく国会図書館に所蔵される文明十四年（一四八二）の本奥

書を持つ江戸末期の写本「論語義疏」に「論語発題」が附され、なおかつ、その文明の奥書は「文明十四年寅年三月於足利官濃山口茅檐下書之」と記し、まさに足利で書写されたものであったことなどを例に挙げ、「論語発題」は足利学校で編纂されたものと推測している。

この推測は、断定とまではいかぬが、前述の「論語義疏」写本の足利学校にまつわる転写の実態とも符号して、当時の「論語」講読の足利勢力の浸透を説明していて甚だ興味深い。

「発題」の発想と同様に、「義疏」の必要な部分を抜き取って、「集解」のテキストに加え、「集解」をより読みやすくしようとする恣意が生まれるのはむしろ当然の成り行きであったと言えよう。ここに、「論語」各篇の内容を纏めた「義疏」の一文を篇題の下に加えた日本特有の「集解」テキスト（庚・辛類）が成立したのであったろう。

してまた、前述するように、庚類・辛類の如き、「義疏混入」の「集解」本が多く足利書写形式の影響を受け、しかも「義疏」が足利で相当に書写享受されていたこと、そうして、義疏混入本「集解」の書写年代が、室町時代後期、即ち、九華などによる「発題」形式の簡略な解題書の流行した時代と、そう違わぬ頃にあるということ、これらの事実をもって当時を顧みるならば、更なる推測を重ねて、「義疏混入」の「論語集解」伝本の出所を、足利学校に求めることは、果たして、理に適わぬこととは言えぬのではあるまいか。

とすれば、足利現存の、九華自筆の「集解」古鈔本の持つ意義も、零本ながら、これらの大きな背景を説明するかのようで、深いものがあると感ずるのである。

いずれにしても、室町時代において、「論語」講習の中心は、博士家の勢力に優るとも劣らぬ、関東の足利学校にもあったことを、伝存古鈔本の実態から、明確に把握しなければならないと言えるだろう。

附　説

名古屋市蓬左文庫所蔵本（110／18）は、テキスト自体、「義疏」の影響を受けたものではないが、「論語集解」の本文と注を元にして、その各文句の下に邦人の注釈を漢文で加えた、所謂、「論語鈔」の類に属するもので、阿部前掲論文の「文明七年奥書論語鈔」の系統を踏むものである。即ち、講義録である注釈を漢文で記した珍しい例である。首に何晏の序を残し、その次に仏（釈迦）儒（孔子）道（老子）の説明を加え、本文は、「子曰学而時習之不亦悦乎」に何晏の集解「馬融曰子者男子通称……」を添え、集解本の体裁を残し、その後に「論語者孔子弟子孔子平生或時君或諸侯大夫或弟子論難問答語……」と言う具合に邦人の注釈を加える。読むためのテキストと言うよりは講ずるためのテキストであった。

つまり、こうしたテキストの存在こそが、経典講読に際して、文字の校勘を行ってより正しいテキストを得ようとする、より古い姿勢から、次第に中世的な禅の仏教的な経説講釈の流れと混合して、講説のためのテキストという目的がよりおおきな位置を占めていく事態を物語っているもので、「論語義疏」の「集解」本への混入は、まさにこうしたテキストに見る流れの、然らしむるところと言っても過言ではあるまい。

第四節　その他、刊本や南北朝時代以前写本の影響を蒙る古鈔本「論語」

「論語集解」の写本が鎌倉時代以来のものも存していることは、前言で述べた。さて、これらの古いテキストは博士家の家深くに蔵されて数百年の時を見送ってきたのであるが、室町時代に書写されて、その遺風をあらわしている

伝鈔本が存在しないわけではなかった。とは言え、鎌倉と室町とでは、学風に差異があったことも主要な要因の一つではあるが、室町時代の新しいテキストの成立を背景に、南北朝時代以前の「論語集解」の姿は、ほぼ埋没したと言っても差し支えないほどである。

従って、その伝鈔本の伝存は寥々たるもので、宮内庁書陵部蔵本（457／208）（日／40）の二本が、ともに南北朝時代以前のテキストに基づいたものであるのに過ぎない。前者は、大東急記念文庫所蔵鎌倉時代末期の写本（清原頼元手校本）に基づいたものと言われている（「図書寮典籍解題」昭和三十五年・宮内庁）。後者は、字様が鎌倉時代のもので、それを室町時代に真似て写したものと考えられるものであるが、零巻の残缺であるからその実態は究めがたい。

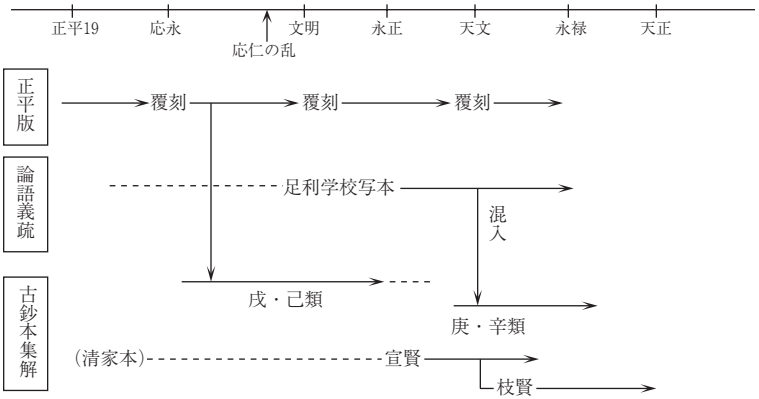
いずれにしても、室町時代の読書人は、積極的に新しいテキストを作り上げて行く多様な伝授を基本姿勢としていたから、旧来の古写最善本に拘泥することなく活動を続けて行ったのである。

また、やや傾向をことにする伝本が存在することも注意するべきである。斯道文庫蔵本（091／253）は、天文永禄（十六世紀半ば）時代の写本と推定されるが、内題を「詳音句読明本大字論語」とする。経文のみで、注は無い。所々に小字の双行で、「説」に「悦／同」とか、「鮮」に「上／声」とかの音注を附する、所謂、中国の坊刻本に見られる課本の体裁を保っているものである。巻上を存し、下を欠くので由来を示す奥書などが見られない。これは、大陸渡来の刊本をそのまま写した転写本と見られるが、室町時代の古鈔本にはこうしたテキストはあまり例がない。勿論、大陸渡来の唐本はそう簡単に手に入るものではなかったし、禅宗の高僧が手に入れた唐本は、たちまち満紙書き入れの手沢本となって、流布はしないものであったから、尚更、転写本の普及はあり得なかったのであろう。

しかし、本書の底本と思しき唐本は現存せず、むしろ、かく題した唐本が存在した証として貴重視されるべきものである。北京の中国国家図書館に所蔵される「魁本大字詳音句読孟子二巻　元広陽羅氏刻本」は、題名から察して、恐らくは、本書と姉妹篇たるべきものであろう。

第五節　小　結

以上論証した如く、室町時代における古鈔本「論語集解」の流伝は、大まかに言って三種類に分類される。鎌倉時代から家の秘伝を護持してきた博士家の「論語」も、南北朝になると、伝授を承けた者によって開板、世に知られるようになり、むしろ博士家もその開板された正平版を積極的に利用していくことになった。テキストそのものの秘伝から訓読の秘伝に、伝承の重きを置き、正平版を横目に睨むように伝えて行ったものと思われる。一方、緇流は武家社会との融合によって、独自にテキストを作製、講読を行っていった。学界には既に清家の学統を汲む緇流も多く、訓読の世界では清家点の影響は甚大ではあるものの、これまた自由に読みやすい形に訓読法を改めて行ったことも、テキスト作製の姿勢と相応じる。そして、その正平版の流布は学界に於ける大きな衝撃としてとらえられ、正平版を中心とした転写や、そこから派生した写本による講読が世に行われるようになった。室町時代前期から中期にかけてのことである。そして、室町時代も中期になると、足利学校の向学精神が一世を風靡し、儒学を中心とする学問が武家にも緇流にも当然の教養として要求される時代の流れと相俟って、講義形式の講座が多く設けられ、それに応じたテキストへと変貌を来たし、「論語義疏」や「論語注疏解経」などの古くから伝わる注釈を吸収し、テキストの中に反映していく事態となったのであった。そして、その学風が次第に講読者に浸透していくにつれて、これら周辺の注



釈書を混入したテキストが受け入れられ、所謂、義疏混入本が室町時代後半期に多く現れるようになったのである。

一方、清家は宣賢という中興の祖に支えられて、清家本を維持発展、鎌倉時代以降のテキストを改めて、唐本を積極的に取り入れ校勘に用い、新たな底本を作製するに至ったのである。宣賢の、永正年間の底本は、子、孫へと新たな秘伝伝授を形成し、枝賢や梵舜へと受け継がれ、緇流の流行に権威をもって対抗していたと思われる。その解釈力に関しては、斬新さと考証的意味合いに於いて、清家は遙かに緇流を上回っていたことは、阿部博士も指摘強調するところである。しかしながら、もはや、室町の末期には、緇流博士家ともに、どちらが主流かという区別もなくなり、いよいよ儒学を取り巻く学術環境と世相も、多様化し、近世の初めには清家もかつての勢いを失い、新たな出版文化である古活字印刷の到来に乗じて、清家家学のテキストを世に問うて、最後の華々しい伝承を行ったのであった。慶長刊本が即ちそれであった。そして、江戸時代、林家を中心とした「四書集注」の時代へと趨勢は変わっていった。

その大概を図示してみると上図のようになるであろう。

室町時代を通じて、「論語」が日本の独特の読者層に受け入れられ、独

自のテキストを形成し、漢学教養の発展にどれほど寄与したかは、計り知れない。その実情を知りうる「論語集解」の古鈔本がこれ程多く存在することは、わが漢学文化の本質的理解にとって、極めて幸いなことと言わねばならない。それはまた、中世の全般的な漢籍受容の研究にとっても、重大な示唆を与えるものであることも、充分に認識しなければなるまい。